

江戸名所図會

九

ル 4
3605
9



四谷 四谷 浄門の外より西の方内藤新宿のあり

老云此地の四方は谷あり故は四谷と号する

地小谷有し寛永十三年外廓營造の時浄土を以て東西の両谷を埋め

浄土と号す此の頃ハ民家一軒ありて夫婦二人の居住せし其

此地ハ永祿の頃霞村とよひたりと云伝ハ或云往古此地ハ武蔵

野は續々一曠原なり此所彼所ハ土民の家四家あり故

四家と云へり共ハ一事跡合考は往古今の尾州公の屋敷表門の地及

高井戸の方より四家と稱し往來は往來は往來は往來は往來は往來は

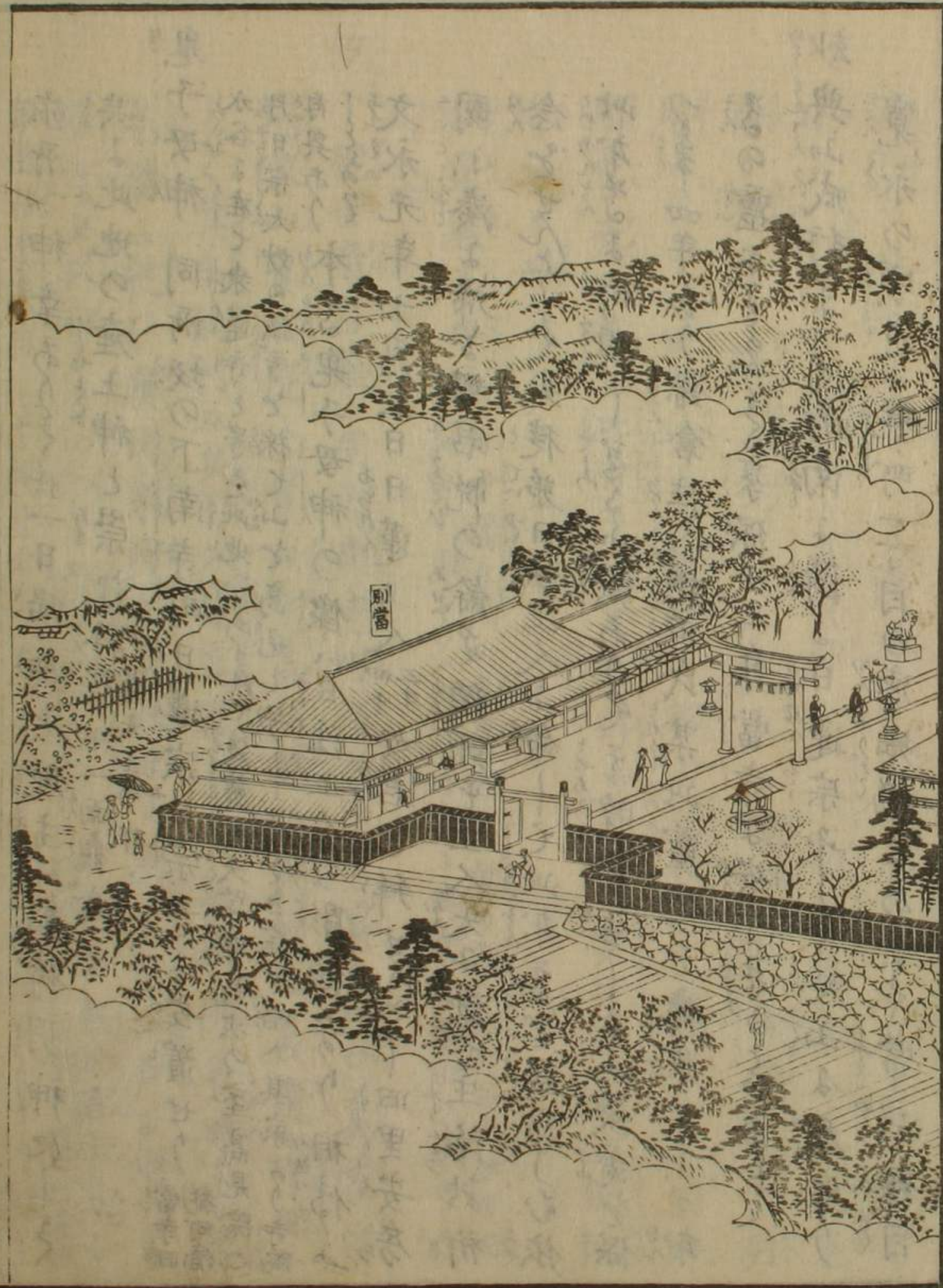
牛頭天王社 同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入

二丁目を西より 故は俗字して此小 祭神素盞鳴尊 弘法作紫の一

本は四谷の人家用け 神主ハ芝崎氏の神田明神 別當を寶藏院

号を 寶藏院 祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町 傳馬町二丁目の

昭和十九年四月五日 三上高士 贈



社王天頭牛之谷や四



旅所へ神幸ありて廿一日帰興を地主ハ稻荷明神に
共ニ此地の産土神と崇む本地ハ十一面觀音
行基大士の作也

鬼子母神 同所坂の南南寺町日蓮宗日宗寺ニ安置せり當寺日
蓮宗

水谷ニ在テ乘蓮寺ト号セ此地ヘつれて後藤堂大學頭高次の室高見院心
月日宗大効の法号ヲ採ク山ヲ高見ト号シ寺ヲ日宗ト唱ヘ其家より寺院
再興アリ本寺鬼子母神の像ハ日法上人の彫像ナリ相傳ハ

文永元年十月三日日蓮上人四十母君を拜せんとい旧里安房

國小湊ニ歸る母君悦の餘ヲ頓死モ上人大歎テ生活ヲ祈

念をせんとい先徒弟日法上人命して此本寺を造らむ依

此本寺ヲ祈願シ修ム小驗ありてモ曉蕪生ハあハ後壽を保

つ事四年あり鎌倉住人鎌田氏某此靈像を傳來せしが本

寺の靈ハよりテ享保十三年當寺ニ安ニまシとシ

妙典山戒行寺 同所南ニ隣る日蓮宗ハ延山ニ屬せり

寛永の頃迄ハ糶町一丁目の御堀端ニありテ常唱題目

修リの庵室ナリ近隣宮重氏庵主ト共ニ力ヲ合セて

遂ニ一寺ト當寺ノ日貞師ハ山本勘助晴幸入道道鬼

齋ヲ孫ニ延山日悦上人ノ徒弟ニ寛保中ハ十餘歳ニ當寺ハ明

曆ニ至リ此地ニ遷ル徳門ノ額ニ妙典山ト書セてモ朝鮮

國李彦ノ書ニ此所ノ坂ヲ戒行寺坂又其下ノ谷ヲ戒行

寺谷ト唱ヘり

分身鬼子母神寺中圓立院ハ安置セて定朝ノ作ニ始メ四谷北伊賀町
秘田安能トハハ醫師ノ家ニ傳來セて來由ハ長久保

夕干觀世音菩薩 同所南寺町戒行寺ノ裏ノ坂口真言宗

錦敬山真成院ニありテ此本寺ヲ越後國村上義清守佛ハ

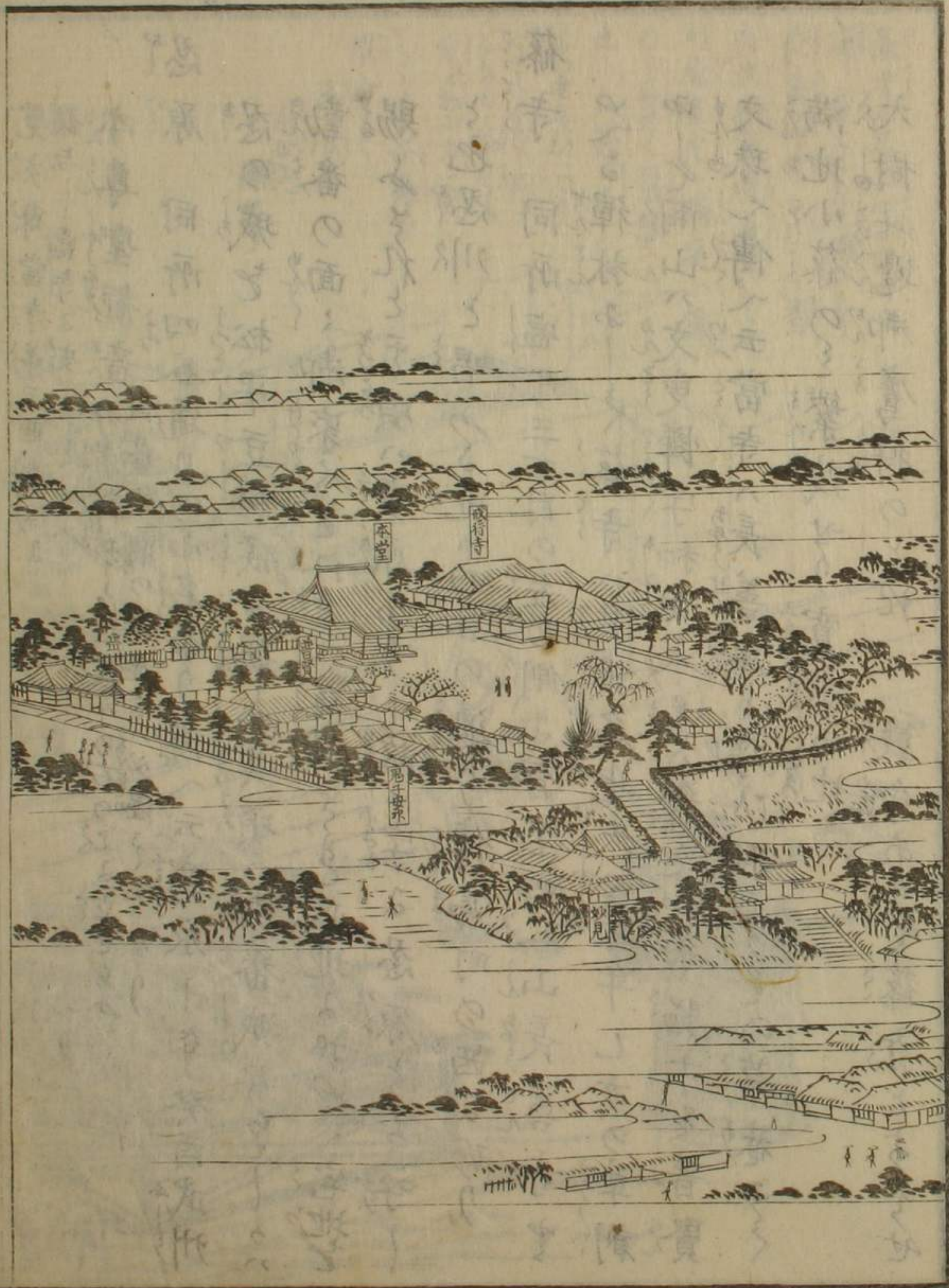
其未流村上兵部入道道樂齋大坂御陣ノ時上杉

景勝ノ後ハ奥州米澤より彼地ニ趣ク後江戸ニ歸リて

當寺ニ収ムとシてモ鐵人云此本寺ヲ監踏觀世音ト号シて

賴清常ニ崇信シて後堂宇ヲ造リ安置セて大坂御陣ノ時ニ村上

村上天皇護身ノ御ヲ依リてモ村上肥後守



日宗寺
 戒行寺
 沙千觀音



三四三



篠寺とついで四谷盛町の
 通り道より左の傍あり
 長善禪寺と号く昔
 序放鷹の頂尚寺といふ
 の庵室より満庭小篠
 のいふ繁茂
 せしる篠寺と
 よらせありしより
 字にふりぬる
 とあり候なり
 堂を初め方三尺
 もりの小篠の
 限ありし
 其澄と
 永世
 標せり

寛永寺當寺第三世都心よ
 後與し當寺は安河と
 本尊聖觀音此作詳なり一尺斗の石の以て立せり
 忍原 同所四谷通りの小名あり傳へ云寛永十年癸酉武州
 忍の城を松平豆州侯に賜ふ其頃ハ御番城なりといふ
 勤番の面々御家人を江戸へ召歸させ此地は地々宅地を
 賜ふされと云頃ハ廣原あり故に字は忍原とて呼し
 と也忍川と唱ふる地ハ四谷の通り傳馬町の西より
 篠寺 同所盛町三丁目の左の側は有る四谷山長善寺也
 とる禪林ありし篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創
 中々閑山ハ文叟隣學和尚本寺ハ釋迦如来脇士を普賢
 文珠へ傳へ云當寺ハ長善庵と呼ひ形もも草菴あり
 満地小篠の繁茂せり寛永の比
 大樹此邊御鷹狩のとき 嚴命ありし篠寺とよらせ

あひ此この地ちと寺てら境さかいあり後のち此この名なあり故ゆゑに寺てら證しやうとして今いまも
堂どう前まへより方あた三尺斗さんせふとの地ち小こ藤ふじの隈かきに徳とく門もんの額がくに世よ寺てらと書か
せし永えい平へい寺てら兼あつ天てん和わ尚しやうの筆ふでなり

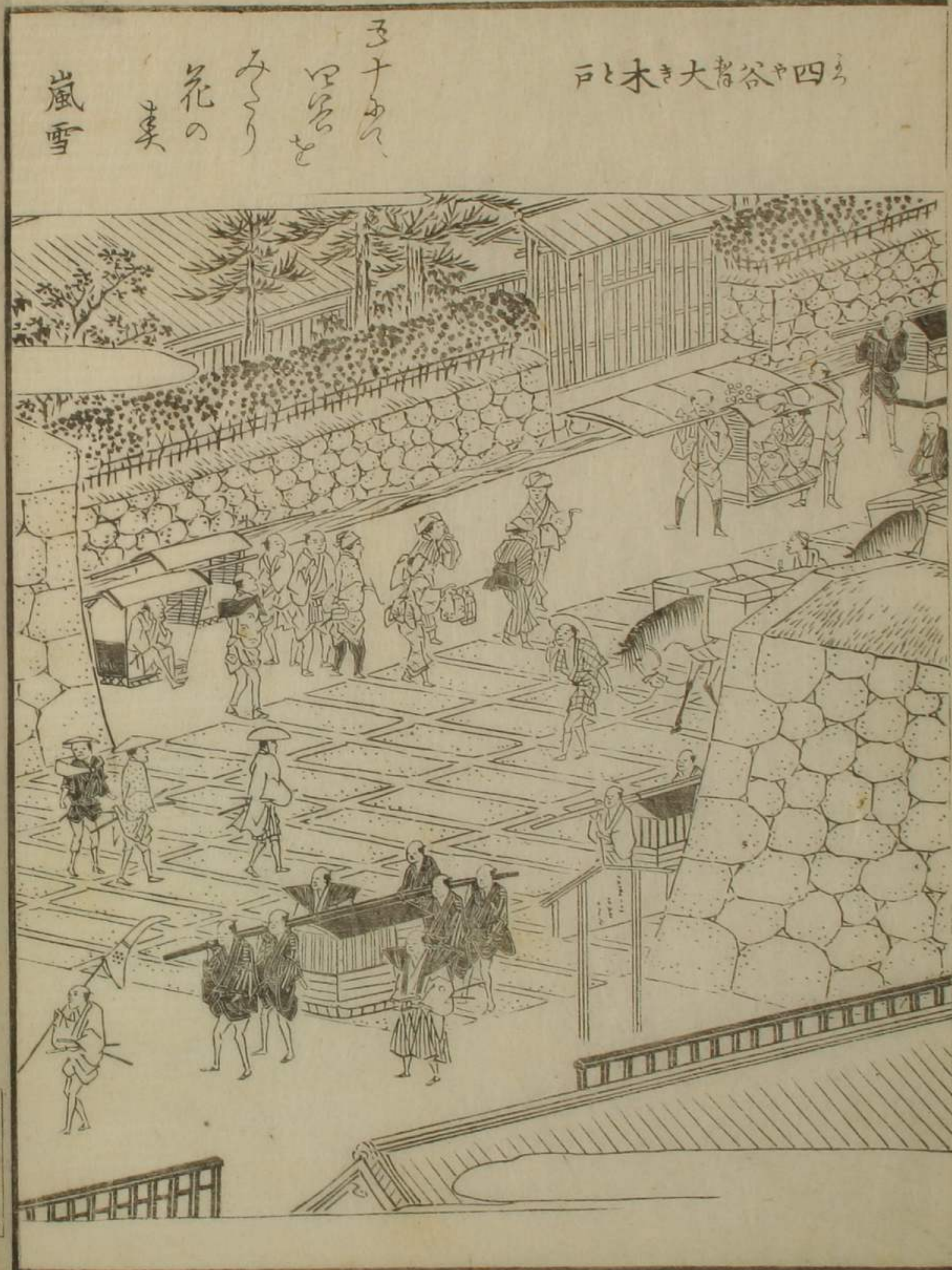
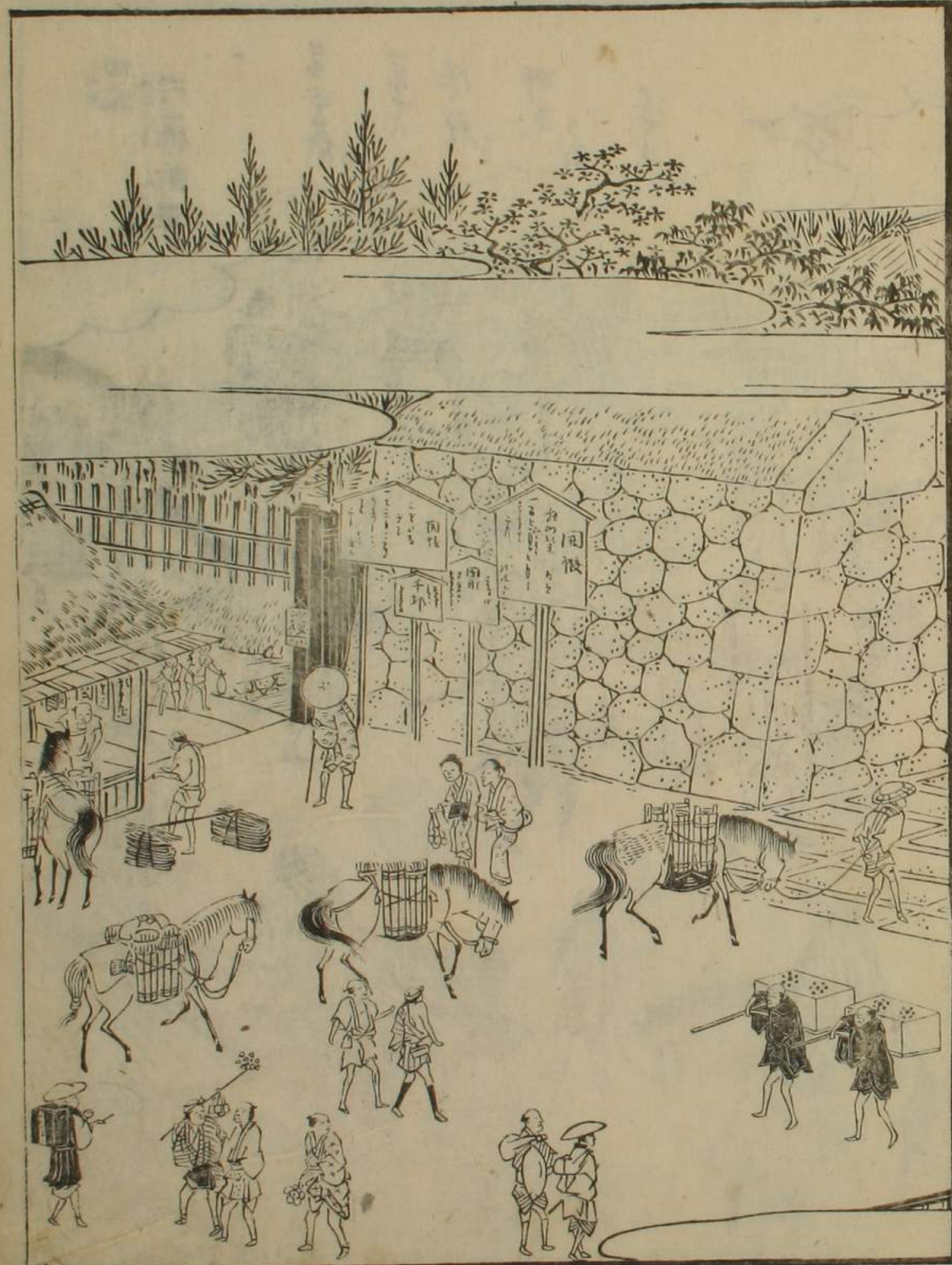
四よ谷や大おほ水みづ戸と 又また大おほ関せき戸と 甲か州しゅう及および青あお梅うめへの街まち道みちなり土と俗よく云い霞せき々々関せき
或ある旭あさひの関せき云いとと登のぼ御ご入い國くにの頃ころ迄まで此この地ちの左ひだり右みぎハ谷や中なかつく
一ひと筋すぢ道みちあり此この關せきあて往ゆ還かへの人ひとを糺ただ問とせしる近ちか頃ころを江え戸と

より附つ物ぶつを駄だ賃ちん馬ばの荷に物ぶつ送おく状じやうあきと通とほさることなり
今いまも猶なほ駄だ賃ちん馬ばの荷に鞍くらあきと江え戸と宿しゆく又またハ荷に問と屋や等ら此この手て
形かたちを吐はく通とほること其その遺い風ふうあり此この故ゆゑあやそ此この番ばん屋やハ町まちの
持もちられた突つ捧ほう指さし辰しん鉄てつホを飾かざ置おけ是こゝ往ゆ古こ關せきのありし時ときの
遺い風ふうあそ又また同どう所じよ西せいの方かた往ゆ還かへの道みちを横よこさること石いし橋はし此
下したと右みぎへ流ながること小こ溝みぞを櫻さくら川がはとあへり

内うち藤ふじ新しん宿しゆく 甲か州しゅう街まち道みちの官くわん驛えきあり 此この地ちハ旧ふる内うち藤ふじ家けの弟あに宅たくの地ちあり
一ひと里り廿に五ご町ちやうあり

日本にっぽん橋はしより高たか井い土と造ぞうの行ぎやう程てい凡およ四よ里り餘あまり
を依より元げん祿ろくの頃ころ此この地ちの土と人じん 官くわん府ふの許もとへ新あらたに驛えき舎しやを取とり
故ゆゑ小こ新しん宿しゆくの名な有あり然しかしとて故ゆゑ有ありて享きやう保ぽの始はじめ廢はい亡せうせし
又また明めい和わ九く年ねん壬に辰しん再またひ公こう許もとを治さむ驛えき舎しやを再また興きやうし今いまも繁さか
昌さかの地ちとあり一ひと里り廿に五ご町ちやうあり 追お分わかつてハ同どう所じよ甲か州しゅう街まち道みちハ
王わう子し通と及および青あお梅うめホへの分ぶん道みちあれハなり

霞せき関せき山さん大おほ宗そう寺てら 内うち藤ふじ新しん宿しゆく右みぎ側がは中なかつ程てい大おほ水みづ戸とより二ふた丁てい餘あまり
浄じやう土と宗そうゆへ録ろく山さんハ属ぞく本ほん寺てらハ阿あ弥や陀た如にょ来らいハ七しち惠ゑ心しん僧そう都との
作さく関せき山さん念ねん誓げ故こ心しん学がく玄げん和わ尚しやうと号ごう昔むかしハ今いまも草くさ菴あんなり
一ひとと寛くわん永えいの頃ころ内うち藤ふじ大おほ和わ守しゆ重じゆう頼らい此この地ちを賜たまはり時とき此この地ちに
住する道だう心しん者しやあり一ひとハ重じゆう頼らい若しやく干かんの地ちを与あへり一ひとハ廣くわう路ろあり
以もつ大おほ宗そうなりと云いふハ重じゆう頼らいとあり一ひとハ寺てら号ごうハ大おほ宗そうと
付つくとあり一ひとハ号ごうとすと當あた寺てら牌はい堂どうの如ごとく弥や陀た善ぜん逝せの像ざうハ

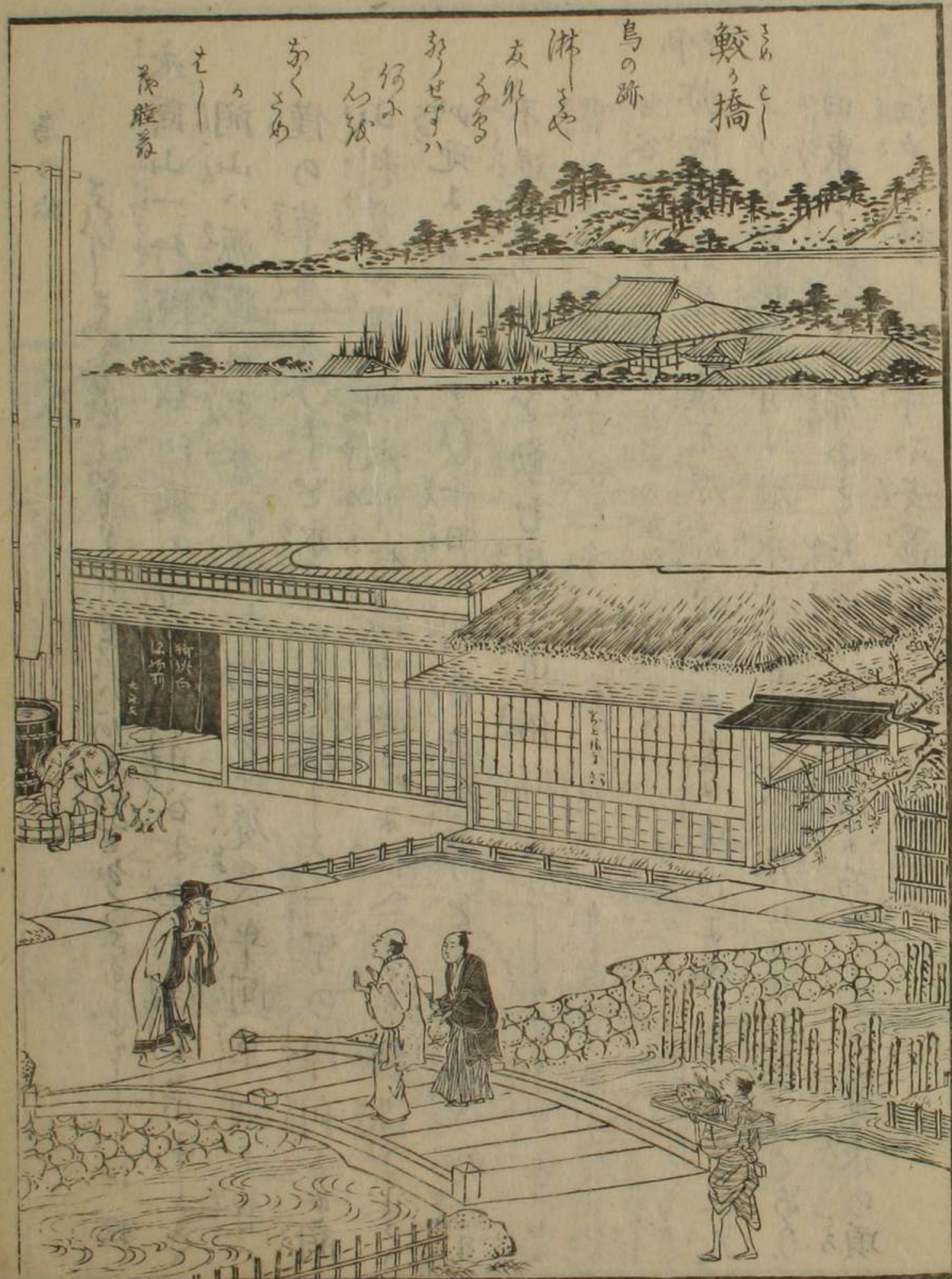


四谷大木戸

五十
四
花
嵐
雪

三





鳥の跡
較橋
淋
友
お
何
あ
た
尾

護 本山天龍寺 同所追分より南の方甲州街道北左にあり
 濟家の禪窟中へて本多千手觀音開山ハ春屋和尚あり當寺
 其先ハ遠州の天龍川の辺にあり一を後江戸に遷一牛込に
 あり一々天和三年癸亥二月十六日火災より竟此地に遷
 たる 延宝の江戸圖に依り考ふる今牛込西後歩町の
 西馬場のあり地所跡中へて今も元天竜寺前と云り
 堂と觀音堂有り又構の内は一里塚有り
 較河橋 紀州公卿中節の後西南の方坂の下を流る小溝に
 架すと云今此辺の惣名とあり一里諺に昔此地海につつき
 たり一々ハ較の辺にあり一々小名と云り一々証と云り一々た
 或人云く天和二年公家の日記録に上木村較橋とありと云
 返り一木の内なりと抄し又佐目河に作る千駄ヶ谷寂光寺鐘
 銘に較の村ともあり

鳥の跡

茂睦

永固山一行院 敷河橋の西の方千日谷に在り浄土宗の
 閑山八源蓮社本誓利覚和尚との慶長年間草創を昔ハ
 僅の草庵なりとて永井家閑基とて一字の浄刹とて閑
 山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政に仕へり多ク剃深し
 此地ハ庵をむきひ千日の間常行念佛を結願の時千日
 不退轉の回向を勤む依り道俗群集せりより千日寺と
 唱へ又此所を千日谷と呼ぶなり
紫の一本とて冊子にあり
橋を渡り信濃原へ移るを千日谷と云ふ
 阿弥陀佛銅像 権太原浄家長禪寺境内に在り高五尺
 なるを佛像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり
 旧東本願寺の佛多く大坂の御城内にありしを寛永の頃
 江戸に移し當寺に安置せり

権太原
長禪寺





千駄谷
大神宮
寂光寺



按應永十四年足利將軍義持の時世なり佛躬くわくく穴あり疑ふ
昔兵討の時損せしものありん故
吾妻堤 同所あり往古の街道の餘波なりとく堤の形今
僅に残りしと

太神宮 同所涉焔硝倉の西の方より有る相傳の萬治年間
關東大疫疾流行を富士の根方より神送りし此地
祭るぬ然し其神輿の中は太神宮の所後有り依て此地
鎮護の爲同所八幡宮の地は祠を建て是を勸請を此地

遊女の松 同所西隣る天台宗寂光寺の境地は有り
當寺昔ハ彌町の貝塚の地ありし元祿の頃天台宗は改む今の
相傳ハ自證大僧都圓雄師あり
相傳ハ此地ハ往古の奥州街道あり廣豁の原野あり
此松樹の鬱蒼とく栄茂し遠く見え渡りし故小霞の
松と号し寛永の頃 大樹此地は涉放鷹の時鷹翦て

涉氣色ありかりし此松はありし涉拳は止る故ハ褒賞
とく其涉鷹の名を此松に命せしと遊女と唱へし先
あふなり

新日暮里 同所二丁より西南の小川を隔て法雲山仙壽
院との日蓮宗の寺此庭をありしと此辺の地勢とあり寺
院の林泉の趣谷中日暮里は似く頗る美觀なり故小日暮
里は相對して假初ハ新日暮と字せり弥生の頃爛慢し
花の盛るふハ大群集せり當寺ハ紀州公御母堂養珠
院日心大妙正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ
同大妙甲の延嶺より靈力を感し大野の辺に土中に
得られて後當寺開創落成の日安置ありとあり同所
一町より東南龍岩寺とあり濟家の禅宗の寺の庭中小
笠松と稱するあり枝のまろり三間ありあり



仙壽院
庭中





龍岩寺
庭中



千駄ヶ谷観音堂 寂光寺より二町をかり西北の方より観

谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置也

本尊如意輪観音ハ當寺開山行基大士の彫像やて法丈

三尺五寸あり世俗目玉の観音と字にあり

往古慶長三年の春盜賊來り此觀

音のハ双眼ハ精金なりと云傳へ鑿り去んとせし

自ら持する所の又ハ貫もく死せり此地の橋氏某目のわたり是を

驚歎し堂宇を再興す此は里民目玉の観音と字にあり

其の縁起は菊岡沾斎翁の説に江戸寺院の中千有余歳を歴る

當寺と云ふ

縁起曰神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃同年初夏

は暫く此地ハ息ひぬ時ハ如意輪觀世音傍の谷より

出現し多し大士ハ靈ハあり依り佛意ハ應しかこみあり

古株を佛材とす此を彫刻しなる故ハ觀谷聖輪

の号ありとの

千駄ヶ谷ハ幡宮 同所一丁許西にあり此辺の惣鎮守や

と号す

例祭ハ九月廿七日あり別當ハ真言宗高雲山瑞圓寺

鈴懸松 門前ハ松の老樹有る寛永の頃 大樹此地ハ故鷹の時

社記云往昔此地深林の中ハ時とて瑞雲現し又

或時碧空あり白氣降り雲上ハ散る村民怪む彼

林の下に至るハ忽然とて白鳩數多西をさす

依り其靈瑞を稱し小祠を營名つけ鳩森との貞觀

二年慈覺大師東國遊化の頃村民等大師ハ鳩森の神

軀を乞求む依り宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移る

古をひき神功皇后應神天皇春日明神等の尊幹を

作し添て正八幡宮に崇り遙ハ後久壽年間渋谷

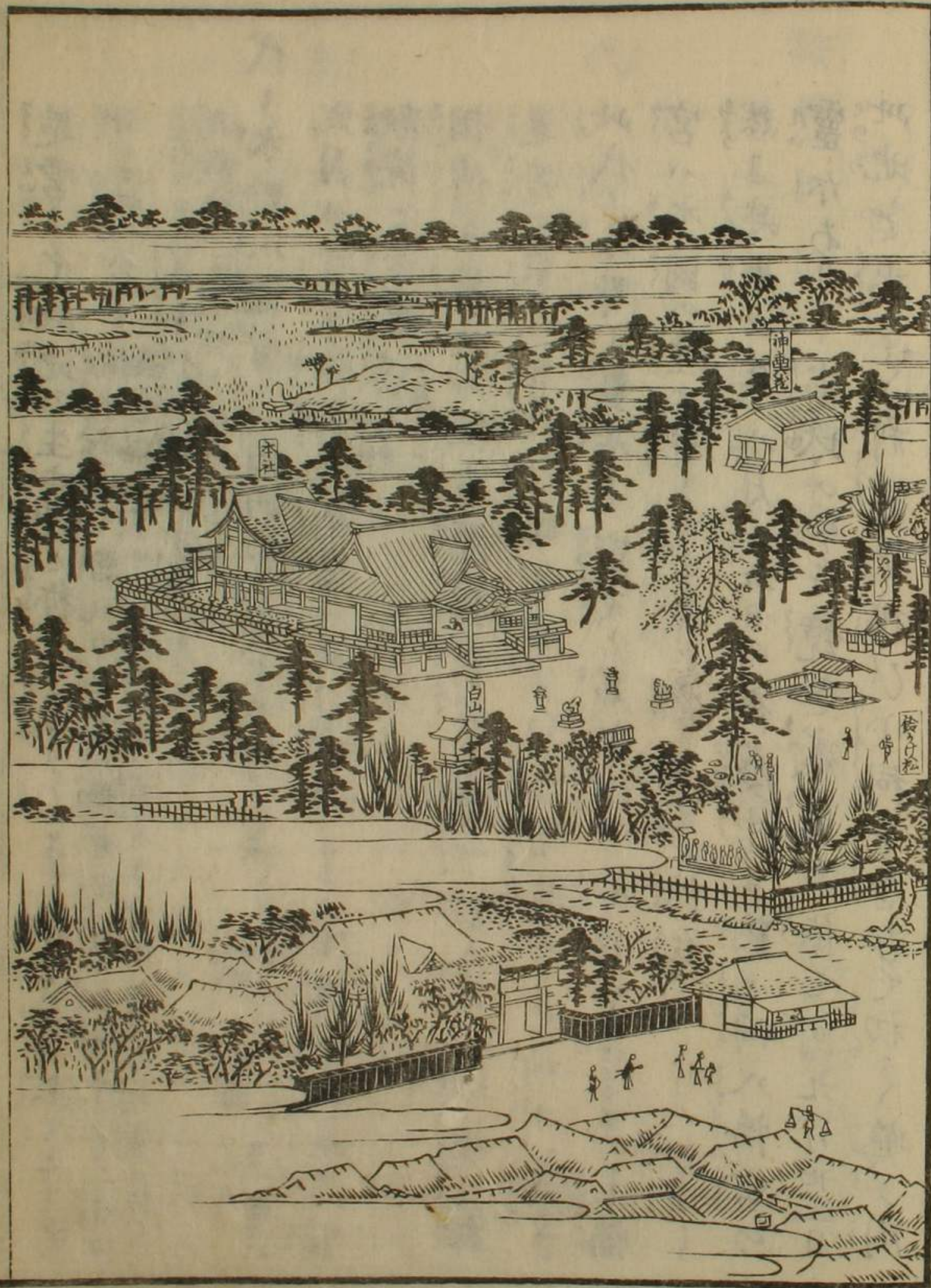
正俊領地ハ鎮座の所神なるを以て金玉丸生前隨身の

本尊惠心僧都の作の弥陀如来の像を本地佛とす社を



千
馬
谷
觀
音
堂





造營して此地の生土神と稱し、南河内郡より靈應ハ張くとて
日は新あり南河内郡當社の前、鎌倉街道の田、武藏今も
所領の中、北条家分限、津原四郎、此野武藏、祭禮ハ
九月廿三日、修修、別當八天台宗、宝珠山福泉寺、智智

代々木野八幡宮 同西の方代々木野の河野の
相傳ふ當社ハ往古源頼家公の旗下なりたる近藤三郎

是茂の家人荒井外記智明とて者故ありて相州を退き
此代々木野の蟄居一宗友と名を改め年月を送り八幡
宮ハ本國の産土神とてあり常よる信怠りたり
然る建曆二年八月十五日の夜夢中ハ鶴ヶ岡八幡宮の
靈ルありて宝珠の鏡を感得を依て同九月廿三日
此地を求りて荆棘を拂ひ小祠を営む初ハ鶴ヶ岡

八幡宮を勸請し、江ノ江ノ

鞍懸松 同所の岡に在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の
頃此地に陣を取此松樹の枝ハ鞍をわけらとて此

代々木橋 甲州街道、五箇村入合の辻より曲折する
原赤堤泉廻り代々木等の五箇村入合の辻より曲折する

高井戸 此所ハ甲州街道より驛舎あり
ハニ里一丁あり八五、此所ハ下高井戸より上高井戸ハ此所あり

西ハありて小田原北条家の分限帳ハ大橋氏某の所領に
無連高井堂とあり、無連高井堂ハ此地の河野の道、奥奥、准准、后后の
田國雜記ハ此所の井、此地ハありて今もあり



代々木八幡宮



代太橋



鬼子母神 下高井戸の道 清月山 覺藏寺とのつゝ 日蓮宗の

寺に安置す 鬼子母神の靈像ハ宗祖大士の作也 佛

像の脊小建長五年癸丑八月八日 日蓮刺之とあり

縁起曰 永承八年九月十二日 蓮大士相州龍口より出でて 誅小伏とせしむ

五年の夏始々 妙法蓮花經の首題を唱へ 始々多し 附廣宣流布のり

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

此靈像を傳へ 時 貞治十八年癸丑五月 此靈像俗家より出て 法味小

武藏國風土記曰 多磨郡 百七十二束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

武藏國風土記曰 多磨郡 百七十二束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

武藏國風土記曰 多磨郡 百七十二束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

爾布田或新田公穀三百七十一束 三字田 假粟

和名類聚抄曰 多磨郡 新田 尔布多云云

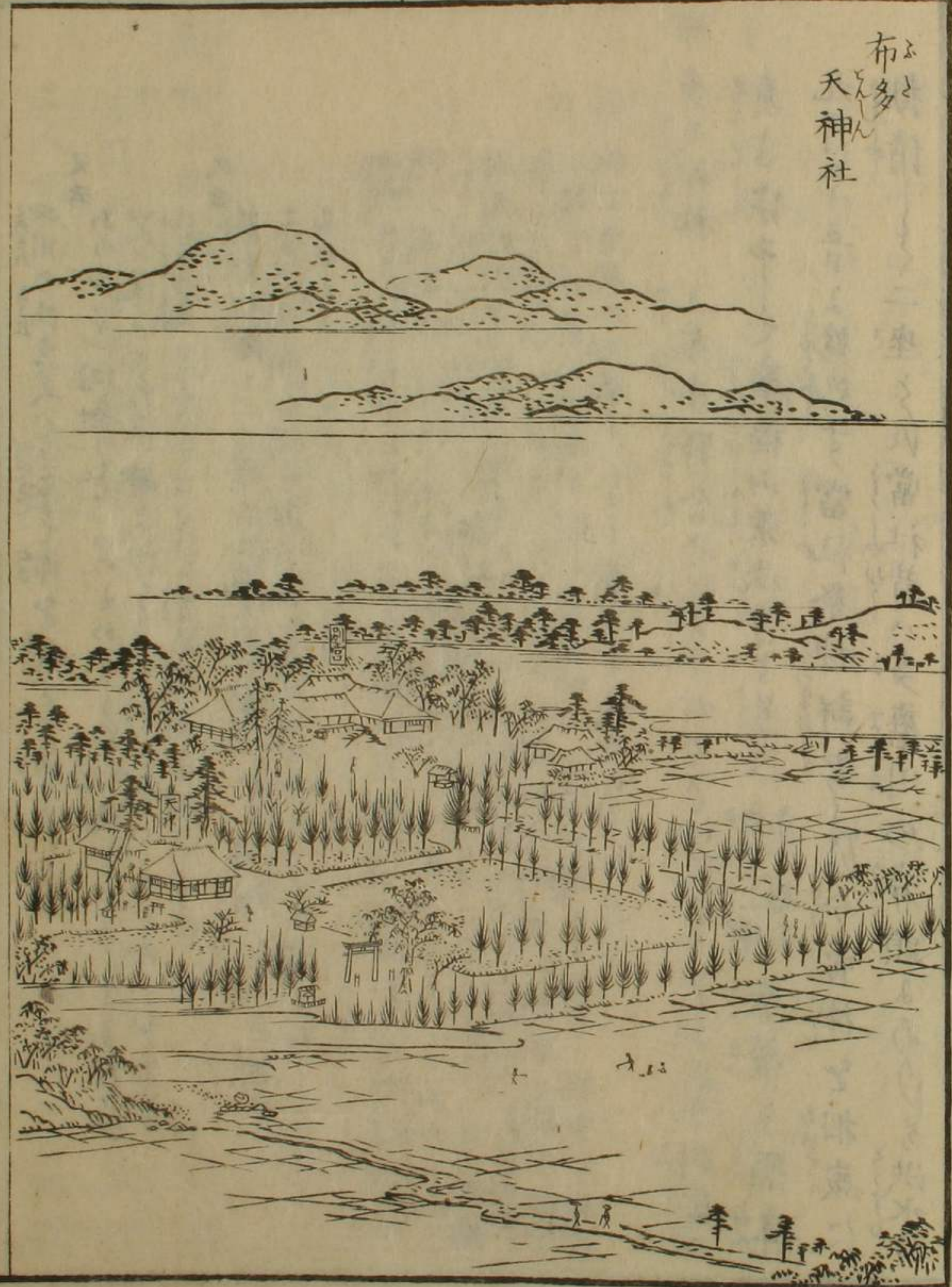
按風土記云 此布田及和名抄云 載云 此地の
新田共此地の
新田共此地の
新田共此地の

多麻河泊尔左良須氏豆久利佐良左良尔奈仁
曾許能兒乃已許太可奈之伎

家集

自作也... 按万葉集多磨郡多麻河又古ハ布多と云 性古麻の布を
製く産せしあり 假字ハあれと云意を合く 麻を制作するなり
國の郡ハ此地より西南なり 此の意を合く 麻を制作するなり
と貢せし國史等ハ詳なり 風土記多麻川の奈下ハ里人調布を作り
内務寮ハ納あり 然レハ此國より貢せし 爲の調布ハ當國ハ産するの
依多麻川の水流を考へ 舟中の逆より 水原ハ 奈下ハ 調布ハ 宜し
製く布田より下流ハ 漸海に近き 故に 舟中の逆より 水原ハ 奈下ハ 調布ハ 宜し
よろし 故に 舟中の逆より 水原ハ 奈下ハ 調布ハ 宜し
其形勢及び唄ひ物の言葉も 調布の産を 考へ 舟中の逆より 水原ハ 奈下ハ 調布ハ 宜し

布多
天神社



此川の流のまはハと云々布を流さハ海まで

又云
あのまハヤレ松屋の子マのりもわさるぬねはまさーハぬひ
ツの澤とさるむい瀬はほろもささすもささすもささすもささすも
津もささすもささすもささすもささすもささすもささすもささすも

又云
張金の鶴ハ二三羽まひ日ひあち通ひやハ山越ハ山越ハ山越ハ
ろろ川ハ何の用さしあけさろろ川ハ何の用さしあけさろろ川ハ何の用

此の頃ハ古と称する地あり是も古也
間ハ深屋と称する地あり是も古也
深屋ハ此の名あり安房上野局ハ何れハ東鑑建久六年七月八日の祭下ハ武蔵國
あハ此の頃ハ何れハ東鑑建久六年七月八日の祭下ハ武蔵國
と誦す同書ハ今按ハ俗ハ手作布の三字を用ゆると云ハ調布ハ和名
扱ハ豆岐の沼能とあり貢ハあり布の字をとり

布多天神社 上布多驛舎の辺より右の方四丁とあり別當ハ

真言宗ハ廣福山采法寺と号ハ 浅尾王禪 祭禮を隔年

九月二十五日ハ修りす當社祭神詳ハ今菅神を相殿に
勧請ハ二座とハ當社昔ハ多磨川の岸頭ありしハ洪水の

難ハ罹の後の地ハ迂すあり
延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡

虎拍神社 同所北の方十丁計を隔て佐須村あり
社前ハ古松二株鬱鬱と

武蔵國風土記曰 武蔵國多磨郡拍江郷
虎拍神社 圭田 七十三束 所祭大歳御祖神也

延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡
崇峻天皇二年己酉八月始祭事有之云云

虎拍山祇園寺 同所三丁とあり日光院と号す天台

宗深大寺ハ属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功

上人開創まの佛域なりと云ハ本尊ハ立像二尺計の弥陀

青渭社
虎柏社



如来の本佛と安置す作者 赤祥 本堂の向拜の掲る所の虎柏山の
三大字ハ筆者とあり

薬師堂 本堂の前右の方より薬師佛ハ立像御長一尺
をりあり行基大士の彫造なりとあり

此堂宇二百有餘年なり前迄ハ此地より東南の方三四十
歩を隔て耕田の中ありとあり

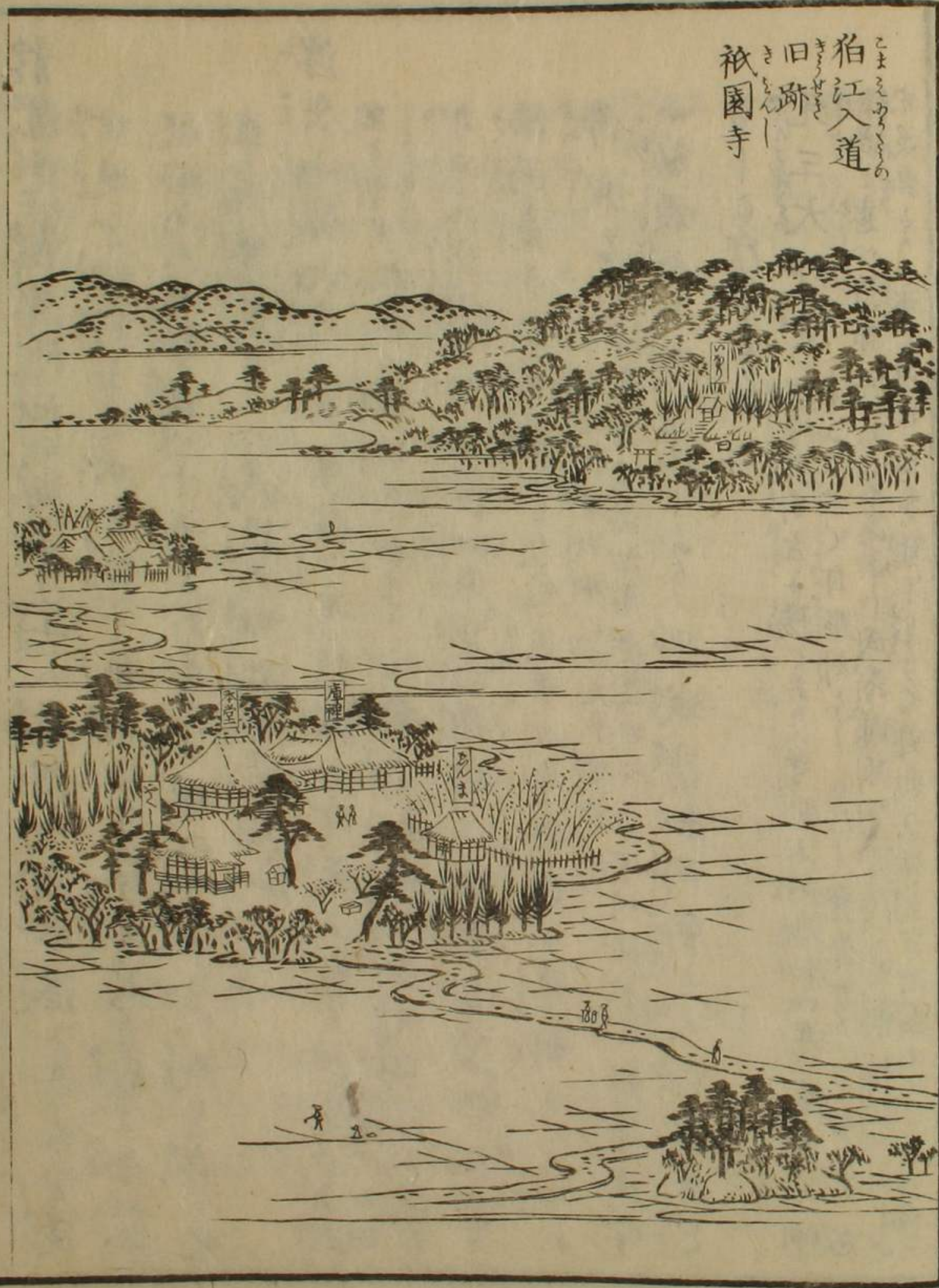
賊の為ニ佛器の類ひを奪つれりハ終ハ祇園寺の境内ニ
遷せしとなり

拍江入道旧館地 祇園寺より良の方六七町を隔て二百歩あり
の岡なり空堀の形なり巖然とて残る此地ニ入道崇むる

所の稻荷の小祠あり土人里の稻荷と稱す祠前極の老
樹一株六圍ありの存せり

わく武義國威光寺領内小乱入田を川根籍小及小由院主の像圓海

東鑑ニ承元二年戊辰七月十五日
道増西悪黨五十余人を率



伯江入道
旧跡
祇園寺

評物とのつを奉り 州本柏江小作のハ伯江を誤りたるものありん又云
 十一月七日二品入落供奉の人名の内小野江平四郎といふ名を注す
 按て續日本書紀云 仁明天皇の御和十年甲子五月武蔵國多磨郡柏江
 郷より新婦と出するを裁らるる事あり 州本籍江は作らば柏を誤れり
 せり武蔵國風土記殘編にも多磨郡の内は柏江郷といふ地名を記す
 和名類聚抄中 同郡の郷名は柏江とあり 古が江と訓すされど此
 地を今 佐須村と称し 郡の郷名は多磨川の北 宇奈根村に隣り 駒井邑と
 呼ぶ地あり 恐らくは伯江の郷の移記なり 北条家分限帳は多波川の北
 駒井郷太田新六郎知砂の内あり 此の駒井の旧地あり 駒井の北
 青渭神社 虎拍神社より北の方深大寺村の中あり 土人
 此地を字し 天神の谷戸といふと 祭神詳ならず 世に
 青波天神と稱せり 相傳ふ古ハ社前ハ湖水あり 龍
 青波の称ありと 社前楓の老樹あり 数百餘霜を経る
 そののり
 延喜式神名帳曰 武蔵國多磨郡
 青渭神社云云
 按て神名帳は青渭とあり 今本阿遠伊と訓す 土人云古當社の前ハ湖
 水満々といひ 故ハ青波の称ありといひ 今青波小作と阿遠葉と訓さるハ
 櫻ありふ 然るに 櫻同卷 青沼明神の条下と 櫻照てさるる

龍渭堤 青渭神社の辺あり古ハ青渭の湖水湛々として後
世堤を切開く水を乾し耕田とあすところ故に今此不
彼亦六七歩或八十歩はあまれる塚のやまりの残り存して
草樹繁茂せるハ其堤の旧跡ありといふ

浮岳山深大寺 昌樂院と号し深大寺邑はあり
里と号せ大古ハ法相宗ありし惠亮和尚以来天台宗に改む
本寺ハ空冠の阿弥陀如来惠心僧都の作ありといふ當寺を

福満童子の宿願ありて天平五年癸酉は草創せる此
佛城なり 日本年代記云天平勝宝 四十七代 廢帝御宇
二年庚寅深大寺建立云云

小勅願所と定られしより 平城清和兩朝も又勅願所と
なりしありといふ

元三大師堂 本堂の前左に傍てあり寺記云應和四年惠心大師
和尚と惠心僧都と心をひとつて自彫刻ありし靈像なりと惠心
尤靈跡あり永く此靈像をせしむるに武藏國深大寺ハ代々の帝勅願の地中

年の春ろろ不安置あせ来靈應のちあろろ月毎の三日十八日殊よ正月五九月
の十八日ハ別業護摩供と修行ありあろろ近郷の人群參せり此日門
前ニ市を立つ 先の靈像と共ニ靈應のちあろろ月毎の三日十八日殊よ正月五九月
降魔尊像 先の靈像と共ニ靈應のちあろろ月毎の三日十八日殊よ正月五九月
中ハ此水早懸 減ちて水と云ふ云々 靈應のちあろろ月毎の三日十八日殊よ正月五九月
宮の傍にあり昔此山崖あり此石を建て要石と号し云々 鐘樓 大師堂の傍にあり

武蔵國多東郡深大寺 長四尺三寸 口二尺三寸 雖治
右伏以當山蒲牢開基以來革更其數不一或雖治
鑄有破裂而無聲或雖討得有薄畧而不鳴爰感諸
數降臨勳力廻皇命風永痛佛日亦明如藍鎮靜法輪
常轉更乞諸檀主二世善願一切成就仍昭銘功
德其辭曰 山名浮岳 新鑄見鐘 消除煩濁
百十萬劫 定期正覺 驚起塵夢 消形卓犖
滅罪生善 令八人正覺 驚起塵夢 消除煩濁
永和二年 丙辰八月十五日 大工山城守宗光
龜島辨財天祠 別當前大僧正法印大和尚位守慧運
齊門前左の方の池の中島あり後小滿功上人飛天崇られりと云

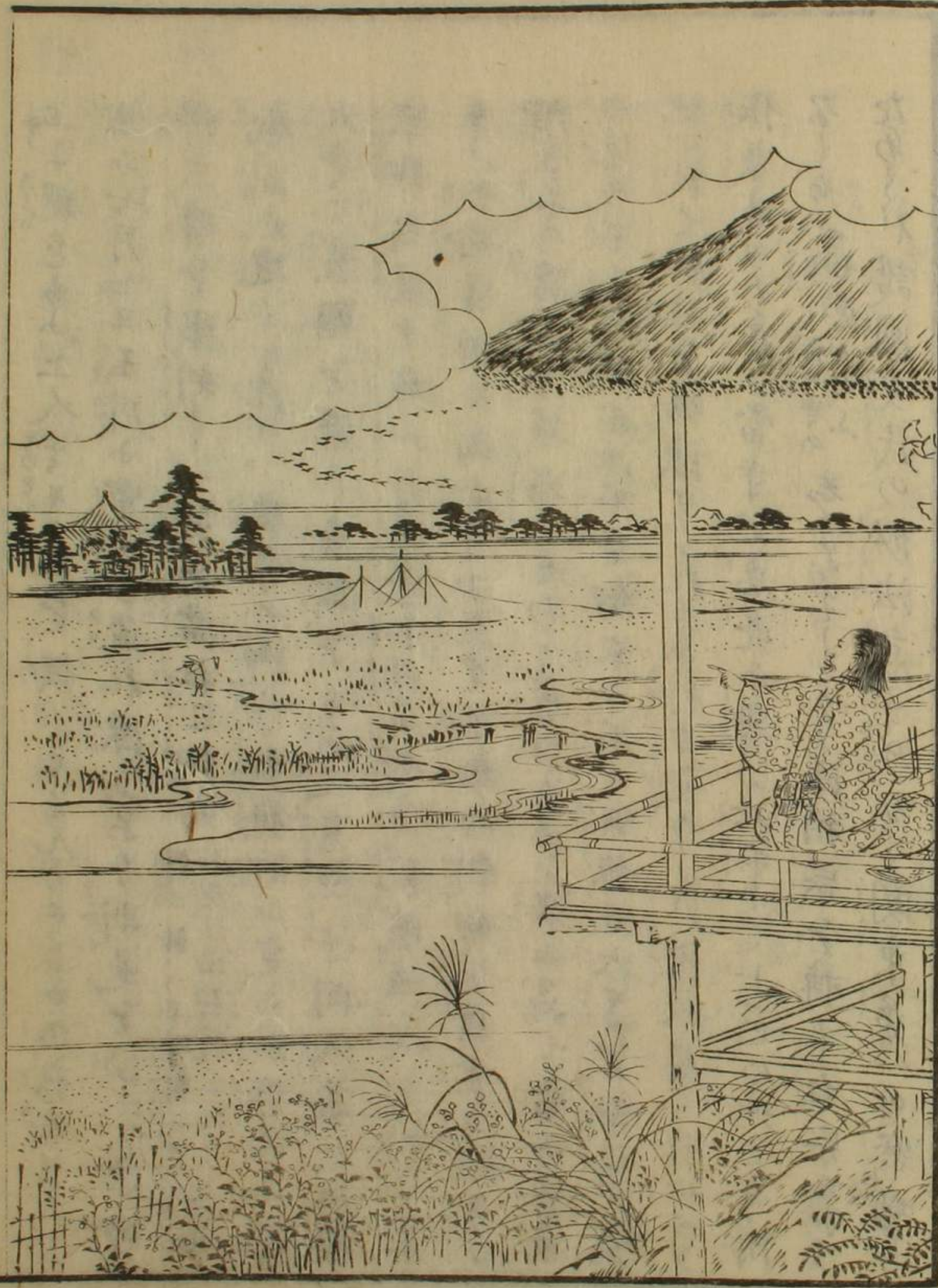


深大寺



毘沙門天吉祥天社 昔各別社ありしを後天の相繼ぎ合祭す
其の童女あり祭り相繼ぎす
深砂大王社 大門並木相對す 縁起曰天平五年癸酉滿功上人此地に當社を
創す 東照大権現宮及び八幡 深砂大王影向池 社に對しあり 往古深砂
に劍権現宮と相繼ぎす 深砂大王の祠前 仁王塚 同所
に劍立石 當國の國分寺に至り不動の利劍を虚空に擡りしに劍石
より此号ありとあり 福満童子祠 深砂大王の祠前 仁王塚 同所
の道を一丁許に西へ登り塔塔とあり 往古塔なりあり ありん 我ら
二王塚と字す 相傳へ昔何某の子當寺二王門の邊に遊びてありしに
姿を見失ふ人々を驚かし山に大に馳動す ありん 當寺二王門の三王塚の
野見の影を着せし衣を破却し土中埋りしあり 二王塚の影ありと
王の像とありし門を破却し土中埋りしあり 二王塚の影ありと
縁起曰 聖武天皇の御宇武蔵國多磨郡柏野村に獵師あり
柏野村今佐名を右近とあり 年頃山に入水に臨むに殺生を業と
須村とあり 名を右近とあり 年頃山に入水に臨むに殺生を業と
ある時むむとあり 女来りて妻とあり 名を虎とあり 此妻
常小夫をとりて殺生をとむ 右近の妻のいのちを隨ひ竟よ

狩漁を止むる後一人の娘をまうけつとてかゝりて大に驚か
早く生長あり然る福満と唱ふる童子ありて此娘は逢初
これハ父母大に怒かざるを賤し一人はあをせんり本意あるを
とて二人の中をとり娘をハ此里の池の中島小家を營みかこふ
居しむ福満ハ日毎岸に至る是を歎くといふもかひなし昔
そりこの玄牝三藏渡天の時流砂川に至る佛を念せしう
深砂王現きし川を涉りしを思ひて一心に念しこれハ
一の靈龜浮き出ぬ福満を甲小乗る島に至り娘はあむと
得たり父母後此を聞き神明の冥助ありとを知り隨喜
して娘を福満小妻ありせこれハ竟一人の男子をまうけ父母の
願ゆかりに此兒出家し滿功上人といふを後とありしに渡り大衆
法相の旨を傳へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓により
深砂大王の社を建立し當寺を創し時神靈水中に岩



上は現もあし上人 容を摸しとめん 衣本なり
然し七月七日 玉川小靈木の流れ 漂あり 則是をいひ 薬師
佛三昧を彫刻し 一昧を當社に納む 餘二昧は下野國日光 此由
廢聞小達し 廢帝の御宇 勅願所不定られ 浮岳山深
大寺と震翰を瀝き 扁額をとり 又貞觀年間 武藏國司藏
宗卿叛逆を 廢山の惠亮和尚より 仰々 乱賊降伏を祈らば
あし和尚當國の國分寺に 至り 不動の利刃を虚空に投り
墮る所の 勝地を道場とせしむ 誓ひあり 遙小飛て 當寺井泉
の辺の石上より 墮ぬ此石を 劍立の石と云 依五大を 勸清し 此
地に於て 秘法を修練せられし 修行力空り 凡 逆徒悉く 降伏せり
依廢感のあまり 當寺を 惠亮に賜ひ 此より 七邑の地を寄附
なり 七邑と唱ふ あり あり 法相宗を 轉し 台宗のあり
たれ 護國安民の 秘法怠る なく 関東第一の 密場と

なまじり 昔ハ十二字の塔頭あり 大伽藍あり 其後野火の災に罹
り 灰燼とありし 世田谷の吉良家 深く信し 再び
堂宇を営み 波平行安の刀を寄附す 無銘長四尺
繪卷物并 詞書二卷 参議右中将藤原公尹卿筆
抑當寺ハ 関東融通念佛 最初弘通の道場なり 慈眼
大師 大猷公の 上聞小達し 融通念佛百遍を
受させ 賜ひ 忝も 結縁の名帳に 御詳を記させ あり 此の
當寺 融通念佛の縁起 小詳なり 如来の教を 弘通し 現
此法や 或ハ 返百返乃至千返万返を 日課し 我唱 あり 稱名の功德
他の人の 爲し 他人の 唱ふ 稱名を 自ら 爲し 互に 融通し 自他
平等し 修する 功徳 廣大 無切なり 由縁起 音鞍馬山の 毘沙門
天に 念仏の 徳縁 あり 都下 稱し 佳品 然れ 眞
大寺 蕎麥 當寺の 名産 あり 産する の あり 此名を 冠し
難 波田 彈正 城址 深大寺 大門 松列 樹の 東の方の 岡を 云土人を

城山と呼ぶ今ハ麥畑とあるところも此所彼所ハ湍池の形
残り此地向古 清和帝の御宇藏宗卿武藏國司
朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてこゝハ
城廓を構へり

北條五代記曰く上杉修理太夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳わく家を
継武州深大寺といふ古城を再興し北條氏綱向ひ引矢の企むる
難波田あやめあやめといふをせ松山といふ處に北條於山の中
に居りて

我作りて今集の奇をとりあせり返答ありくわくわく松山ハ
深大寺跡 深大寺佛堂の後の方の山續やとて同六七丁と
隔り空堀或ハ柵門杯ありと覺しと形今猶嚴然と

深大寺跡 深大寺佛堂の後の方の山續やとて同六七丁と
隔り空堀或ハ柵門杯ありと覺しと形今猶嚴然と

北條五代記ハ大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉
匠作ハつゝ河越の城ハ引籠り十余年の春秋を送り迎へ
ぬの例ありし例ありす心ちをわひて天文六年の卯月下旬
世を早く去る嫡男五郎朝定生年十三歳中へ家を継
あひぬてのれハ七ヶ日の服忌と経をく道をおくあり兵を
起し深大寺といふ古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企むる
かりとあるハ則此所の事なり

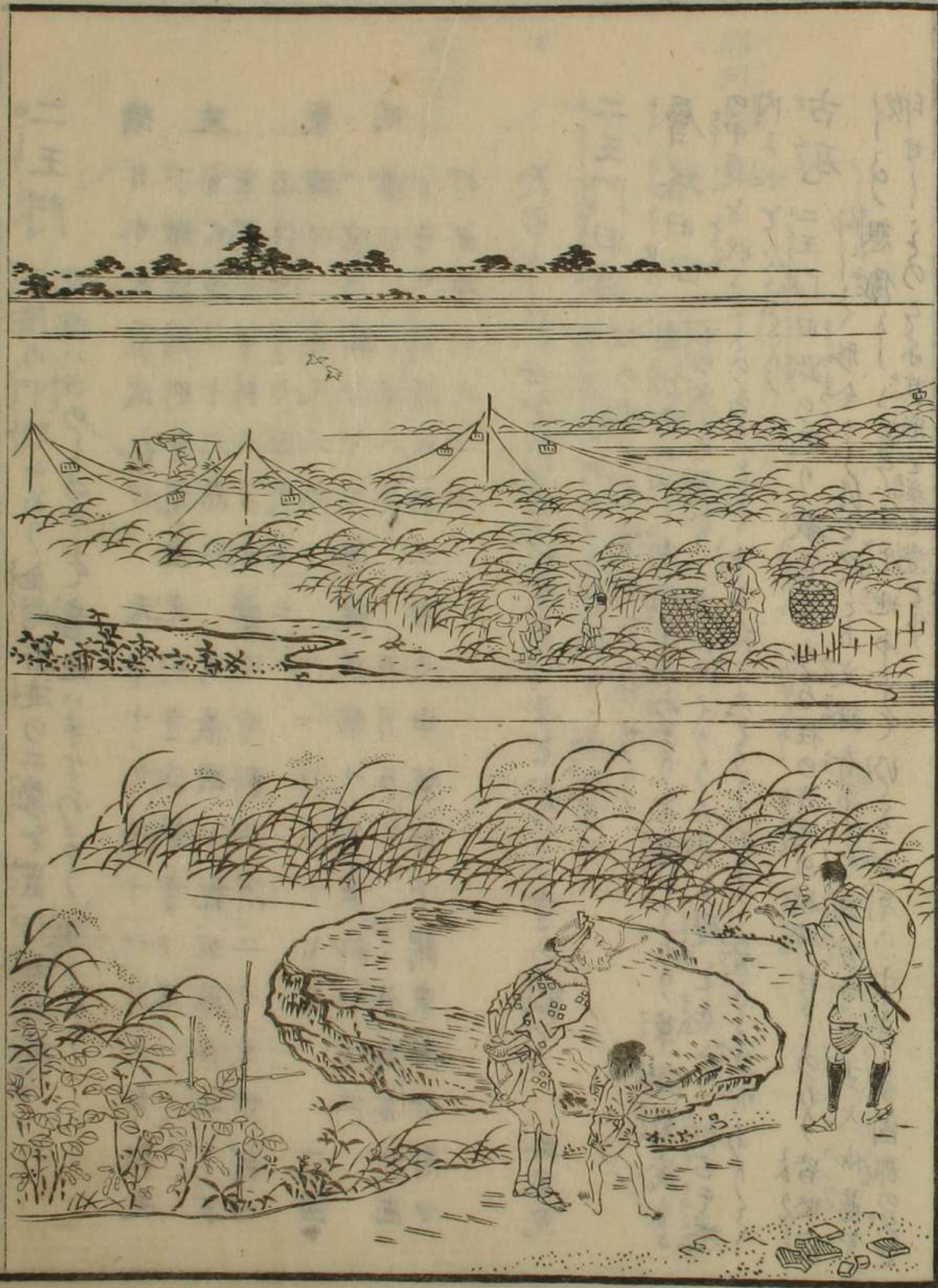
醫王山國分寺 寂勝院と号國分寺村あり府中あり北の
方十八町と隔り當寺ハ天平年間行基菩薩草創する所ハ
一々 聖武天王の勅願所なり中興阿闍梨を教心阿闍梨と号
今ハ新義の真言宗なり

藥師堂 本は藥師如来 阿闍梨行基大士の作なり
額 塗光明四天 深見玄岱筆



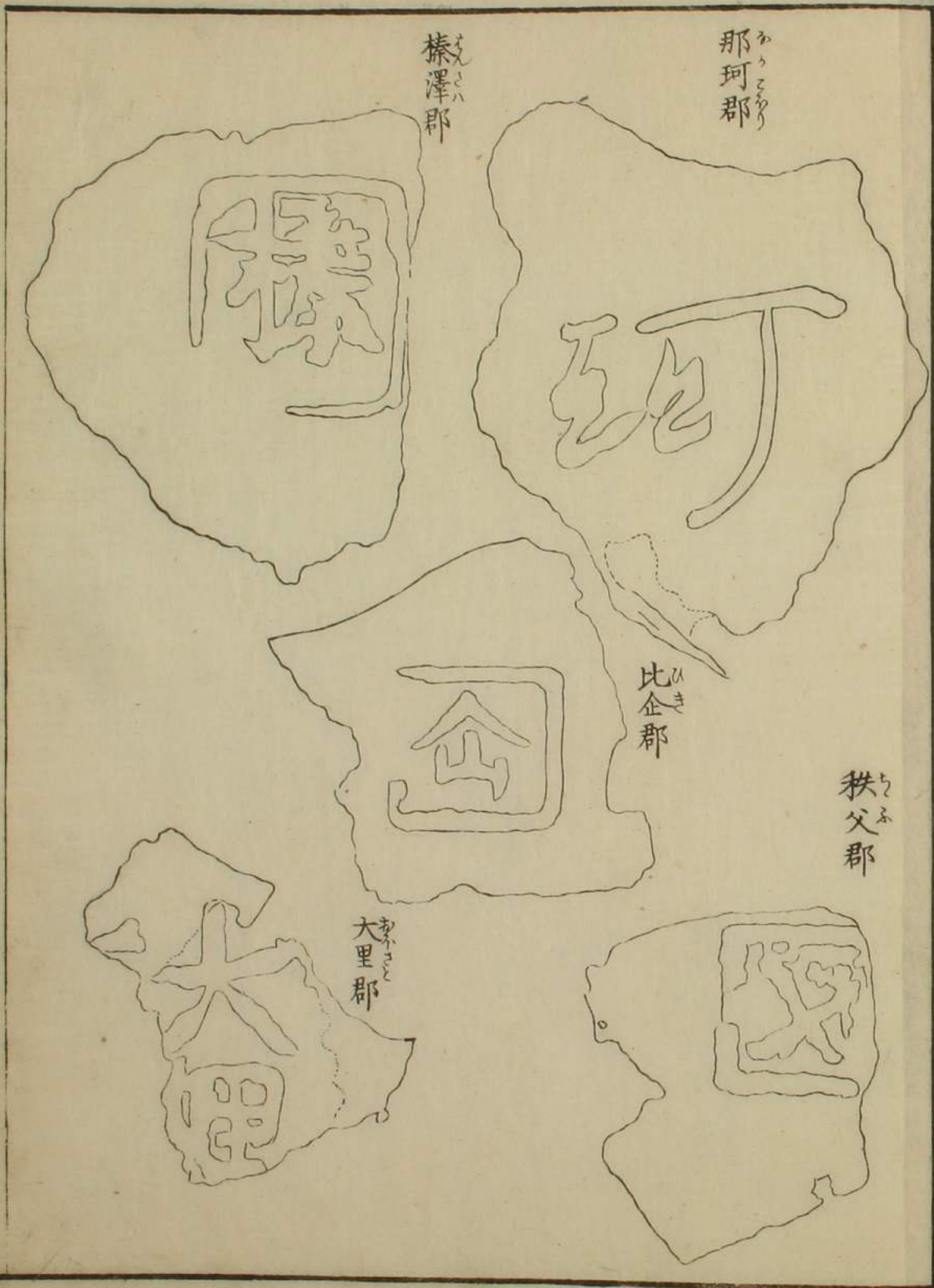
寺ノ國





國分寺
伽藍跡





二王門

石階の中腹あり金剛密迹の二像を置作者未詳
堂柱ハ古のこゝろに奮地ハ半丁あり南あり

續日本紀聖武紀曰金光明寺法華寺十一月己卯詔天
下諸國別令造金光明寺法華寺各四十萬
延喜式弟二料五卷東藥師寺料四萬二千東梵釋四
東國分寺七料五卷東藥師寺料四萬二千東梵釋四
王料七料五卷東藥師寺料四萬二千東梵釋四
鑑曰建久五年東藥師寺料四萬二千東梵釋四
一宮并國分寺三年修復破壞之旨被仰下開東御分國
書曰寬喜三年王經之由被仰下開東御分國
分寺可轉讀云云
行然奉行之云云

たのこゝろに世を分て寺の影

祇名院

二王門跡

寺前半町ありを隔て南の方の
細の中ハ礎石を存せり

層塔跡

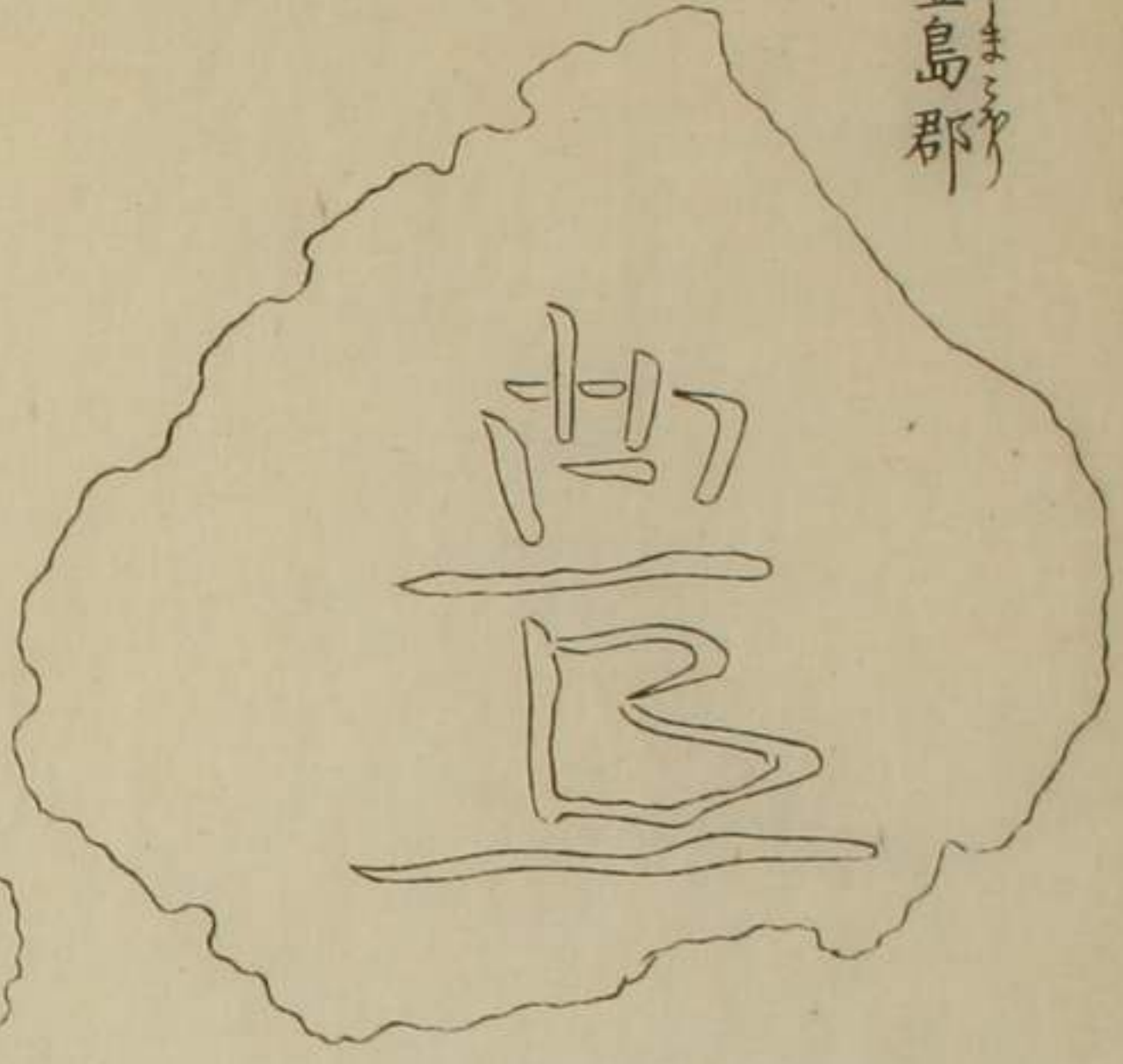
國分寺の北東南半丁ありを隔てあり草栴聚茂
のの中真を収るありと中み徑三尺とあり石あり置ける空穴あり

古瓦

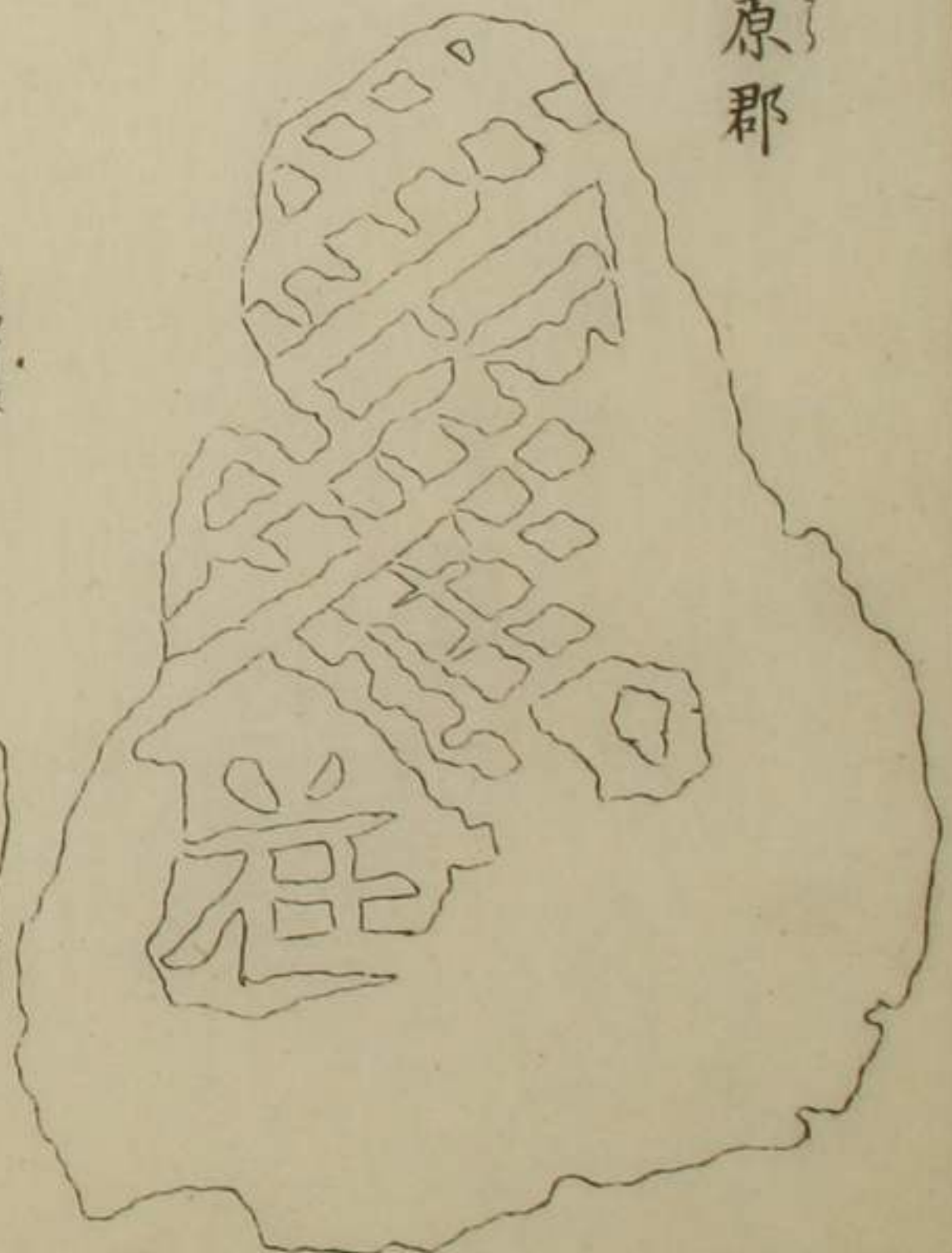
二王門跡の辺り數百歩の往の古瓦の破碎せしあり皆堅密
形全くとあり文録奇中とあり國分寺の古大伽藍を
想像し其形を擧て證とす

印せしものこゝろ其形を擧て證とす

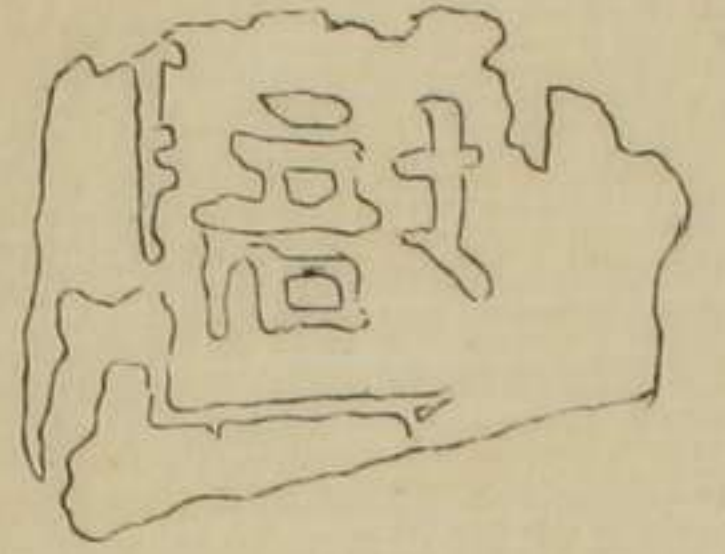
豊島郡



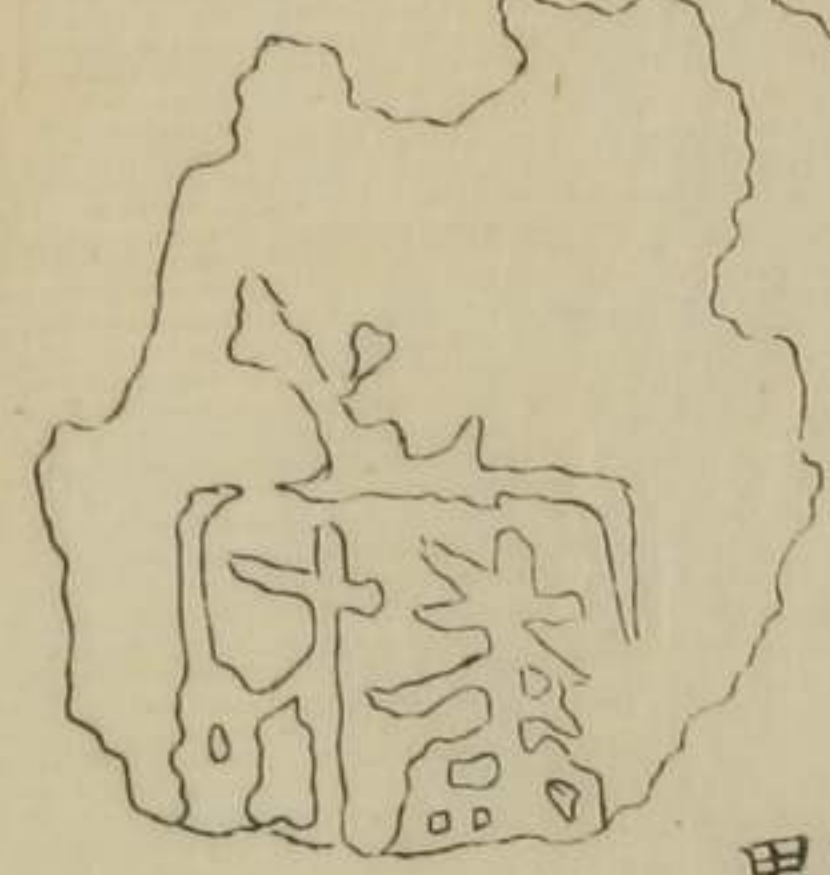
荏原郡



埼玉郡



播磨郡



男衾郡



國分寺碑

藥師堂の前右の方より碑文ハ服元雄中英先生撰む

當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐發向の頃と

當時へ入ありて頃ハ盛大の寺院なりと云ありこの星霜を

経る元弘の兵火中亡びしを新田家少て再興ありしも兵革の

世終古よ復もりな然る室暦年間権大僧都法印

賢盛衆縁を募り新に醫王閣を宮建し侍る所の霊像と

安しと靈跡を表す今古伽藍の礎石のも嚴然とて田間

阡陌の間は埋もれ懐旧の情を催せり

あり或人云わくは食わうけ場ハ頭掛場ありと依りて古合戦の

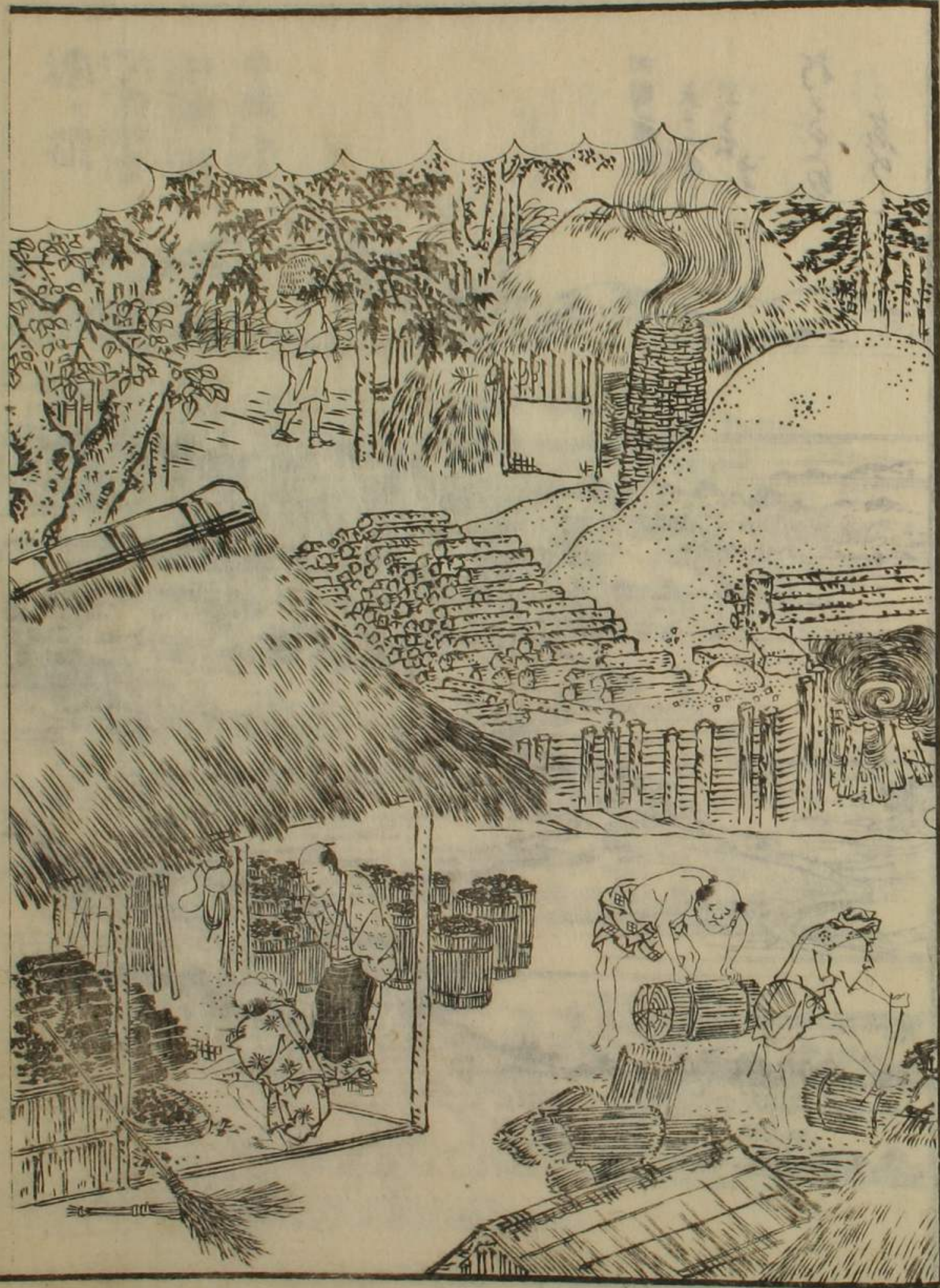
處敵方の首級を掛し地をばハそ傍に食を住居とありしやん飲

富士見塚 國分寺より西の方五町半を隔つ此所小登れハ一瞬千

里殊よ奇觀と東ハ浩茫とて限もあく天涯つら小地

接もをを見よの中秋の夕月のあきや草より咲く草ふ入の

古詠よ古を想像と感情少くす此故に幽人騷客こふ来



くろしや
國分寺村
炭かほ

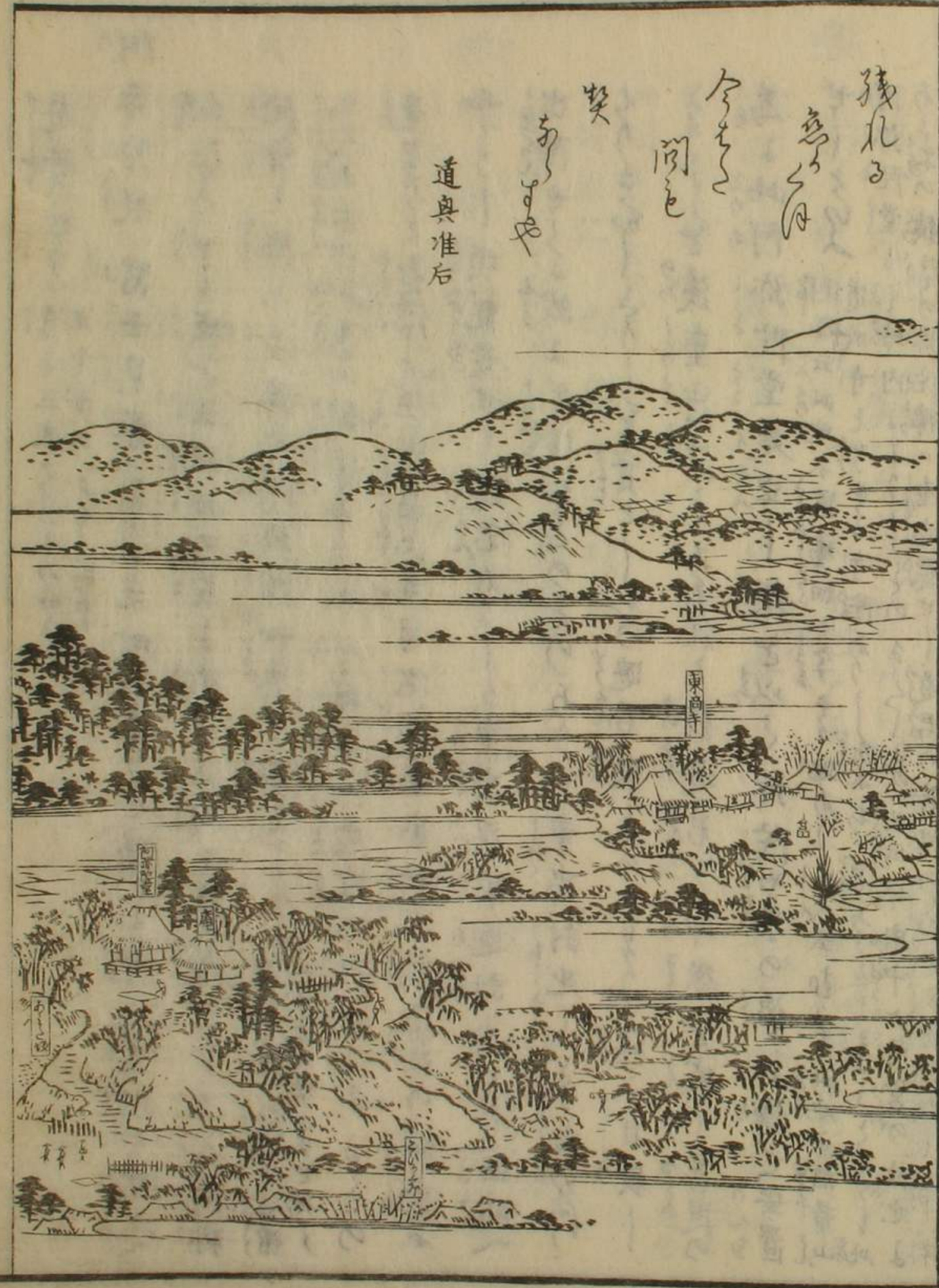


意ヶ窪
 阿弥陀堂
 傾城松
 牛頭天王

回國雜記
 打もて思
 名も



残れり
 今も
 関也
 道與准后



遊賞せり 五十歩あり

阿弥陀坂 富士見塚より十三町ありを隔て憲う窪村の地北へ

向ひく下坂を云此坂の左に傍る岡小草庵あり土人阿弥

陀堂と称す木像の阿弥陀如来を本尊とす

土人云古の昔は銅像なり今府中六所宮の社地にあるとの

見たりとお侍より往古富山左司次郎重忠此地憲う窪の驛舎に

中より頃寵愛せし遊君ありし重忠平家追討よつと西國へ

出陣せし然る後をこののありく重忠討死しし由の

りりしに實とてかの遊君歎きのあり終つ自叙し

るりしを後重忠はみられと彼遊君の節操を感じ菩提の

為に此阿弥陀堂建立し銀を以て弥陀如来の像を鑄て安置

せしと云 道成寺と号する寺あり 又云今府中六所宮の社地は

阿弥陀堂も境内ありし重忠愛せし遊君の菩提の念造立する

戀 此の地は牛頭天王の叢祠あり竹林の中此の地あり 同所坂より下の低き地をいへ古へ東奥北越の國より

京師及び鎌倉へ至るの驛路ありし頃ハ遊女の家居なり

ありしと云 此の地は牛頭天王の叢祠あり竹林の中此の地あり

旧址ありしと云 此の地は牛頭天王の叢祠あり竹林の中此の地あり

田圃雑記 悉く齋と云ふ 此の地は牛頭天王の叢祠あり竹林の中此の地あり

傾城 此の地は牛頭天王の叢祠あり竹林の中此の地あり 同所良の方八幡宮の社地あり 同程の古松二株

雙立せり土人重忠く愛せし遊君の塚印の松ありといひ侍

然れども社地なるものを此八幡宮の神樹ありし

武蔵野 南ハ多磨川北ハ荒川東ハ隅田川西ハ大嶽 秩父根を

限とて多磨橋樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間

等まして十郡は跨る草より出て草み入又草の枕は旅寝此

日數を忘れ向へし里の遙なり杯代々の歌人袂を忘れし

御入國の頃より昔引久十萬戸の炊煙紫霞とせしふ棚引
僅まての跡の残るるも兼應より享保に至り四度追新田
開發ありて耕田林園とあり往古の風光これなりされと月夜
狭山に登りて四隣を顧望もるる江を曠野蒼茫千里無限
往古の状を想像もるるふたどり
狭山八第四巻
の中へ入る

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良歌可多也伎麻左氏爾毛乃良奴伎
美我名宇良爾低爾家里
武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與
比欲利世呂爾安波奈布與
古非思家波素氏毛布良武平半射志野乃宇家良
我波奈乃伊呂爾豆奈由米
伊可爾思氏古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我

波奈乃伊呂爾低受安良牟
武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻
爾末爾吾者余利爾思乎
和我世故乎安行可母伊波武平射志野乃宇家良
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今

續古今

玉葉

續千載

續後拾遺

新續古今

十五番哥合

仍末を度ふひとの武藏野にふるのありりゆる月うを
むさしは月の入るさゆを屋をう末ふかゆるむさし
旅人のけうのふさけくをわさるむさし
むさし地ハねり末も秋秋のむさしわさるありれを
むさしまてこふハむさしむさしむさしむさしのむさし
むさしあゆみのむさしむさしむさしむさしむさしのむさし
むさしあゆみのむさしむさしむさしむさしむさしのむさし

撰政
大政大臣

通方

右大臣

家隆

定家

雅経

元大 花のまもり花より一妻也これか人一と兼業のむさくの末 為實

回国雑記 むさく世の残月をうつめく

むさく一まののこは切ろ野、り那

桂林集 むさく世の長陣せし時やとまきひをばけく

むさく一のハ本流もええは時を幾日ぞまはあふ鳴ん 直朝

武蔵野記行

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむさく世の撰集に餘奇合わらひ家

の集むさく世のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

むさく一世のむさく世のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の 氏康

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の 同

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁 翁ハ其郷姓話らすた 郁芳門院の一萬士と

云院崩まのの後齡二十九やむさく世を避て諸國を遊歴し

此小止る菴を結び月小卧し武蔵野の廣と愛を六十年と

徑く西仍法師は邂逅を一宿を授し通宵古を流し涙を

緇衲小戯を曉小道て別 續扶桑隱逸傳

西行物語

西行物語 武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

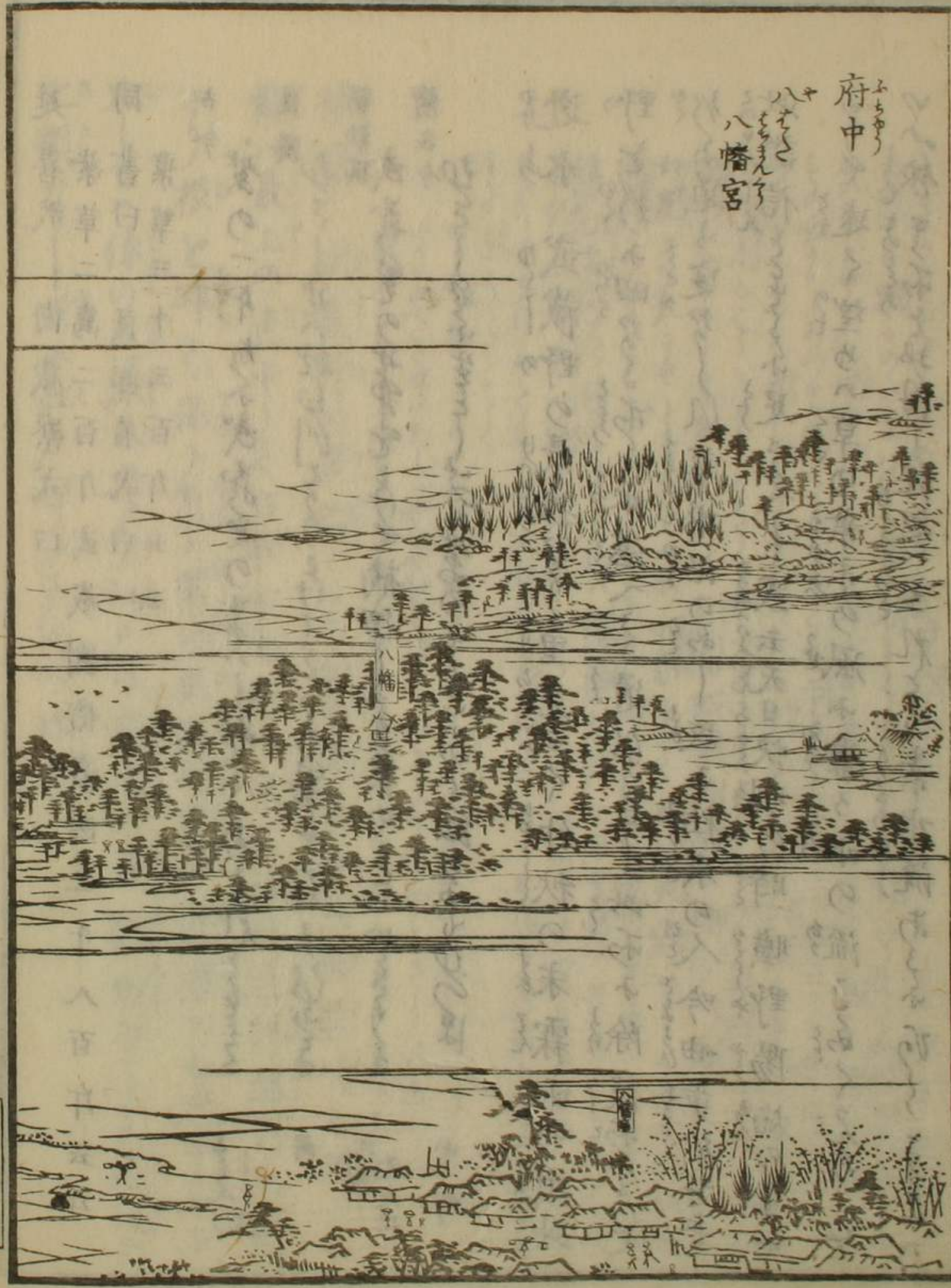
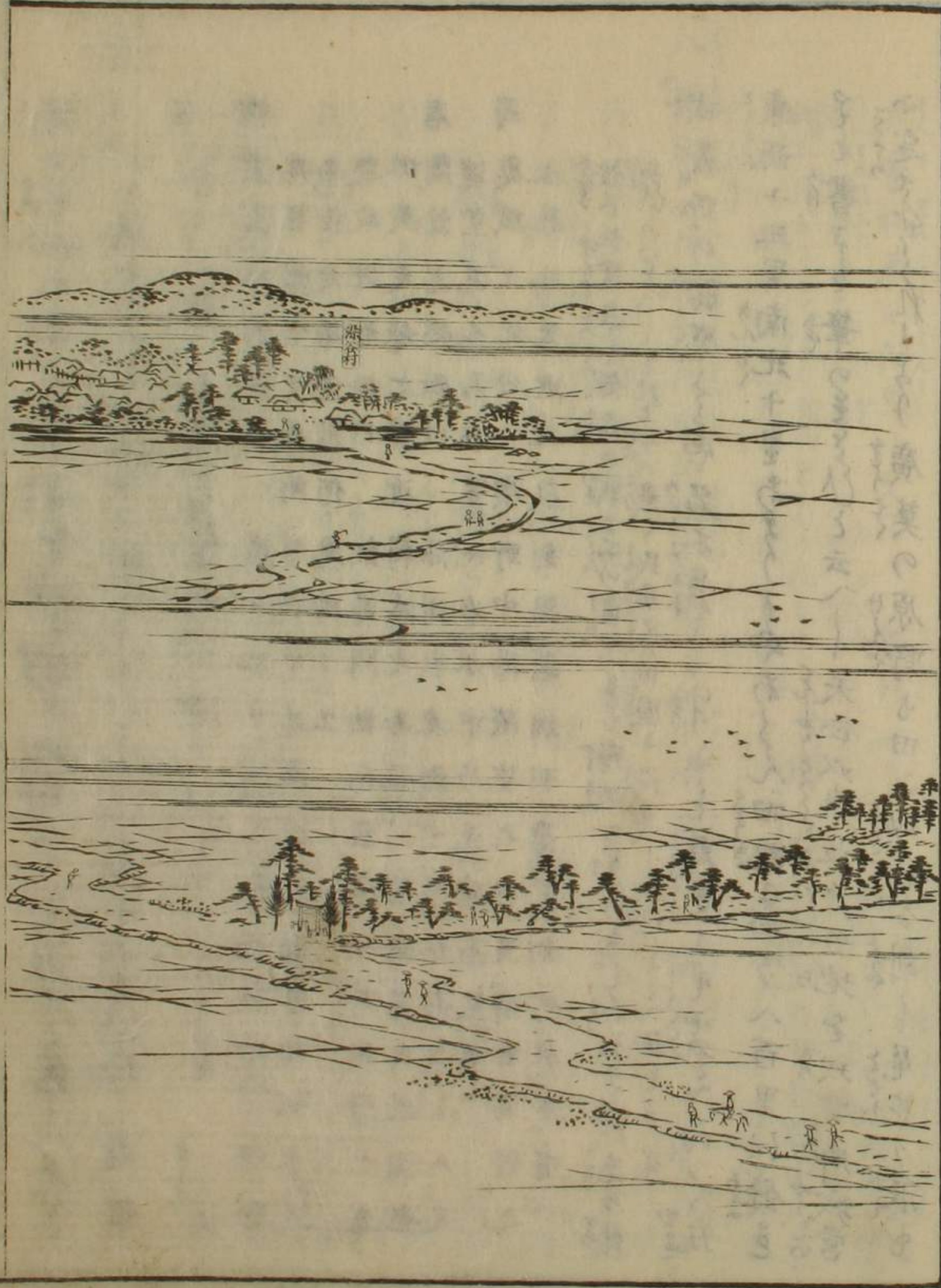
武蔵野翁のむさく世の撰集に餘奇合わらひ家の

庭喜武内蔵察式曰
 紫草二萬二百斤武蔵國信濃國二千八百斤云云
 同書曰氏部省式曰
 紫草三千三百斤云云

紫草 武蔵野の景物とす和名類聚抄無良散岐と訓す
 紫ハ最上の色也古歌也免の色又位の色杯詠あやうせ
 たり根を碎き深き池に紫の根添又紫の根摺ともり女小
 比しくハ縁の色杯もり江戸の紫深ハ最絶妙やしく他邦小
 比類なり故ハ江戸むらさきの稱あり

延喜武内蔵察式曰
 紫草二萬二百斤武蔵國信濃國二千八百斤云云
 同書曰氏部省式曰
 紫草三千三百斤云云

武蔵野の景物なり里老云く仲秋の末霖雨の頃此
 野を移ハ四なる雨ハ水湛へく通ひくこ此雨ハ除彼雨ハ
 仍ハ道も定なり草根沼の如く故ハ往來の人吟咄歩移と云
 此説信とせ不足と云或云天日快明の時曠野陽焰のま
 ありて遠く望めハ草の葉赤の風ハ靡る水の流るめくん
 依る雨と地ハ泥ハ辺へ至れとも素水流あふりさるハ



終つひ小こ水みづの原はらに至いたるをを放はなす此こゝ名なありといいつををよよ為なす

夫つま木き 夫つま木きありといいつををよよ為なす

同どう 夫つま木きありといいつををよよ為なす

性せい靈れい集しゅう詠えい陽やう談たん喻う 夫つま木きありといいつををよよ為なす

飛ひ舉きよ體たい空くう々々無む所しよ 夫つま木きありといいつををよよ為なす

無む物ぶつ走そう馬ば流りゅう川せん何なに 夫つま木きありといいつををよよ為なす

運うん無む註しゆ智ち論ろん曰いは何なに 夫つま木きありといいつををよよ為なす

水すい疾しやく走そう越えつ之の轉てん曰いは近きん 夫つま木きありといいつををよよ為なす

唐たう陸りく勳くん志し怪かい錄りく曰いは近きん 夫つま木きありといいつををよよ為なす

周しゅう遙やう望わう見けん人じん馬ば往わう來らい 夫つま木きありといいつををよよ為なす

水すい影えい此こゝ天てん地ち之の氣き 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

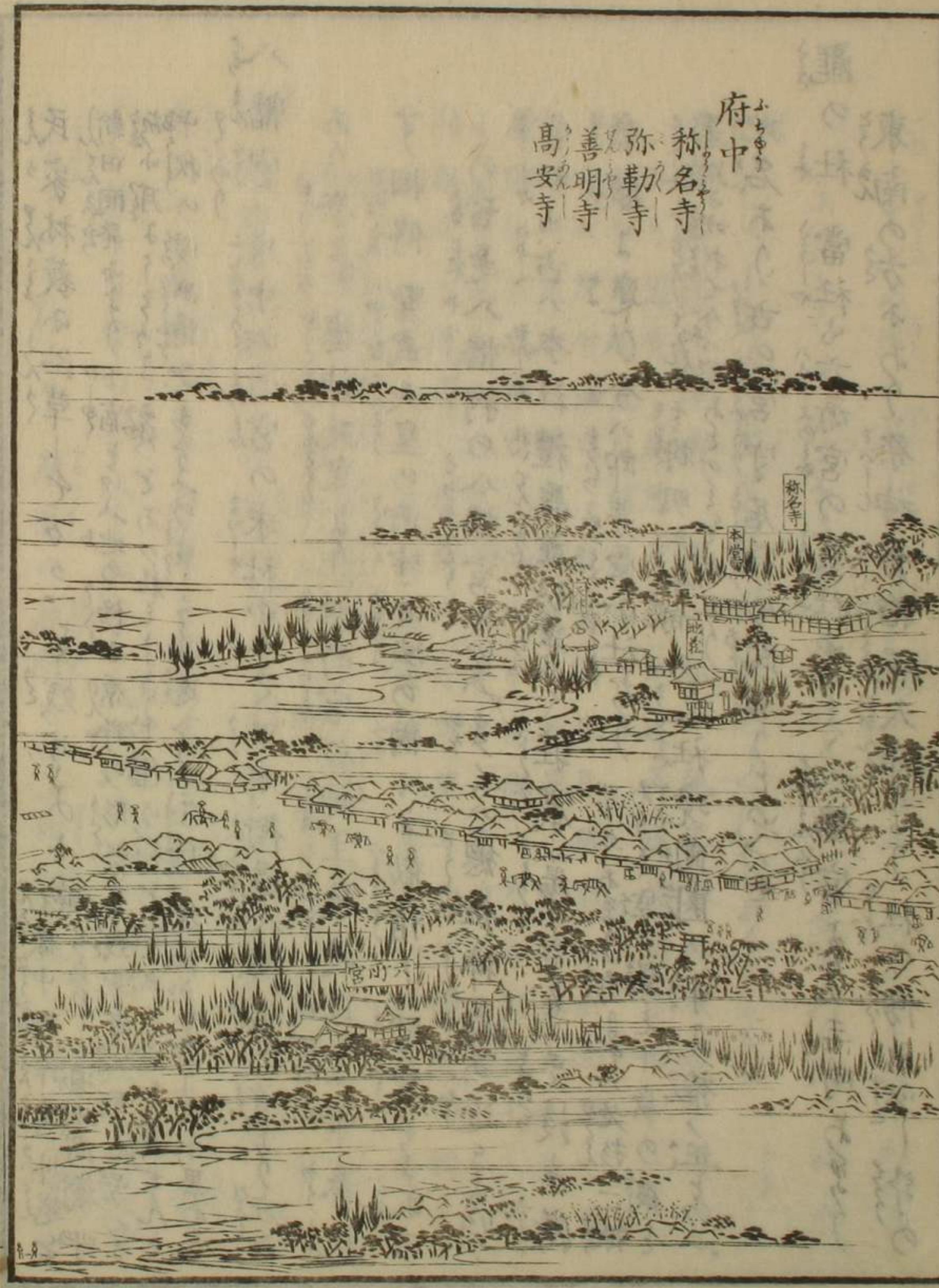
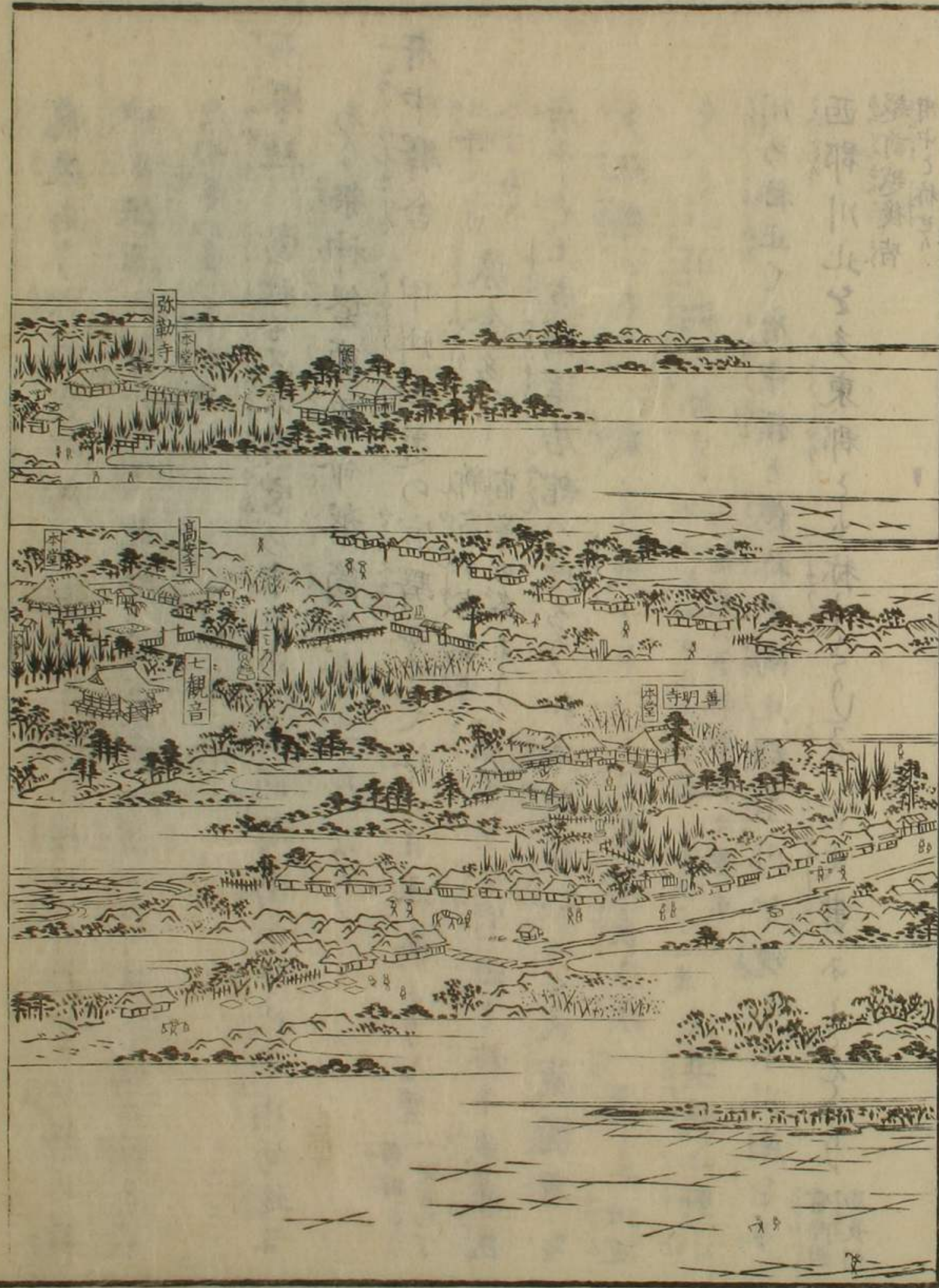
東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

武ぶ藏ざう野の勝しょう栗りつ々々名な不ふ多た 夫つま木きありといいつををよよ為なす

東とう西せい三さん里り南なん北ぺい十じゅう里りああり 夫つま木きありといいつををよよ為なす

瀧

瀧たきの社しゃ 當あた社しゃも六ろく所しよ宮みやの未ま社しゃ中ちゆう々々八はち幡ばん宮みやより三さん町ちやうあり 東南とうなんの方かたあり 祭まつり神かみ倉くら稻いな魂たま大おほ神かみなり 社しゃの傍かたは少すくし斗たうの



飛泉あり六所宮の御手洗池と称せ毎年五月五日大祭の時
神幸供奉の輩ハ五月朔日より此龍に浸る身と清め神夏ふ
たのさつと云

石塚社 當社も又六所宮の末社なり同所南の方代小川の辺に

あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舎 甲州街道の官驛なり江戸日本橋より七里布田あり一里廿七丁

日野へ二里 旅舎多し新本宿番場 舊名を小野縣と稱せ武蔵國

宿等の名あり 府中へ上古國造居館の地あり和名類聚抄にも武蔵國府也

多麻郡小ありと載る徴とをへ延喜延長の頃一變して此辺

をへ小川郷と稱す 風土記曰小川郷公穀二百六十七束 又其後小野小

川の称止て府中領と總称せ尚此郡玉川を境と川南を多

西郡川北を多東郡とも稱し古文書にも

越前越後皆 府中と稱せり

